



古今襪魁考 一

丙天

口 7
3224

古今襪魁考



美濃惠奈郡中津川

菅井九蔵正矩

納上

古今秋魁考原

神木乃大御代尔。中子止云布物予

渡志参采尔。邪留乎。其喜共知留行尔

感直久且使神乃御國乃。其儀尔波依

氏志也。附加努。然備身尔奈母有邪礼

波。愛尊武人也。受依留人也。其狂言

會出。板久。狂礼。慈成。以波。在志

為尔。毛人。乃。其。尔。毛。其。是。加。流。如





古今妖魅考序

師木嶋乃大御代尔。中子止云布物乎。
渡志參来尔。祁留乎。其甚異。加留行尔。
氏。直久正伎。神乃御國。乃風儀尔。波。似
氏志。毛附加努。妖偽事尔。奈母有祁礼。
波。愛尊武人。毛。受依留入毛。其枉言尔。
相口會氏。狡久狂礼。惑波奴。波。無志天。
世乃為尔。毛人。乃為尔。毛。甚惡。加流事。



奈毛轉有苗乎。天地止。日月止共尔。窮
美無伎。大御代乃内尔波。唯暫時乃事
尔許曾有礼。人乃世波。百繼八十繼止
經行氏。遙祁久遠伎事尔。奈母有祁礼
波。慨美歎加努波無久。奈母有祁礼杼。
其將功驗。奈伎物思尔天。何乃代尔加。
此禍事乎。却以給波武止。何乃時尔加。此
惡風乎。直志給波武止。神乃所為乃。甚

願波志久。氏奈毛有祁流乎。吾師大人
伊。神乃御手代止。却以退久止。雄偉志
久健備氏。和乃漢乃。佛乃書尔有苗實
徵乎得。歷世尔有都留事跡乎。捺索米
氏。伊那醜目汚穢伎。佛祖與利始氏。相
交許礼苗僧徒麻傳。現世乃間許曾。人
乃狀波變布麻自祁礼。魂乃行方波。五
月蠅奈須。妖魅止成乍毛。冥府尔罰米

良延氏有留事乎。孰尔見羃志。論定氏。世尔幸倍牟止。著速波佐礼祁苗奈毛。此書奈利祁留。如此有尊伎羨志書乎。徒尔文庫乃内尔。隱米置倍志夜波止氏。鐵胤主尔相謀利。印本止為志氏。萬代尔後世尔。傳倍弘牟留尔奈毛。時波天保二年止云牟乃春。如此云波。越後國蒲原郡新津郷人。桂譽正。

○此書の成る由ありし

よまきれ古今妖魅考といふ書はも。林羅山先生の説に依りて。我父れ。世ろ化物バケモノと云ふものあり。其本縁を考覈められし書あり。いで其大意をよみ述む。化物とは即麻我毛能マガモノの石根木株イハネキナ。草カキハ片葉アラミナワ。青水沫ヨリツも憑託ヨリツきて。言語モノイハしめ。謂ゆる非情の物モノも。起ち活動ハタタうあむ。依類イヒといふを本とあり。みて。人の靈魂タマれ人ろ扱きて。異祀イヒ所行シヨウをれ。或を狐狸の類イヌキに能を毛みれ。まてあう言ふあり。妖魅の二字は。其小當コタウする漢字カンジれる哉。音コトも讀べき。為ムネ子專ムネとハ此コノ用ヨウらる。治チと古くよ。枉物カガモノ悪鬼アクキ。妖怪ヤクイを也。猶ナホくさく。よ書來扱カきは。強シビて拘カを依事イシふく。孰ナニをも書れ。り。ばて麻我神マガミま。麻我毛能マガモノと。何ある義コトぞと云ふ。世の治チれる時を乱ミダさむとし。人れ福フクを見てハ禍ガをれし。万マン小直チカれるを悪アクひて。枉カガき依イを好ヨクむ。故ユ。禍神ガミとも枉物カガモノと云ふ。毛能モノとは鬼神キシ。人種ヒト。万物マンブツ。何ナニも廣ヒロくいふイハ称ナあり。抑オス止トのマ賀ガもの。出來デし始ハジを稽カサふる。

久方此天於神世小。伊邪那岐。伊邪那美二柱大神。男女此御事を始み。御子生
みひる。小女神伊邪那美大神。はぢる事ありて。夜見。国に往坐る。夜見。男神伊
邪那岐大神。その御後を追ひて。其国小到りみへ。然る小此夜見。国をも根
国下於国など云ひて。醜めき穢き国れるが上。伊邪那美大神。まで小其戸喰
ちみ引て。帰るみふ。つと能ハ。甚も忌々。御有状を。見畏み。逃歸り
みひて。後小其穢悪を。祓ひる。むとて。日向の橘。小戸ち小水戸。小到。坐して。
禊祓ひる。ふと。其大御身小著る物等。を脱棄。みひし。長道。磐神。煩神。開闔神。
奥疎神。邊疎神。など。小神。小出。是を。世小も人。小も。悪事。小神の始。あり
り。斯て。千万歳。を過來し。程。其悪神。と。多。多。成ぬる。が上。小。中御世。小蕃国
よ。佛ち。小物を。献れる。時。小。副來。つる。妖魅。も。多。か。し。と。聞。る。小。此。方。り。て。其
道。小。率。れる。者。は。や。ら。て。其。鬼。と。成。り。漸。く。よ。ふ。え。行。て。世。小。は。が。く。志。き。事。れ。も
多。く。成。り。然。る。小。此。妖。魅。ち。小。物。よ。現。人。の。目。小。見。え。ぬ。幽。冥。小。物。小。有。ま。ば。

其情状を察する事いと難き態ある故。よく考明せるもの有らざれば。世の庸
人の辨へ知らざて。思ひ惑ふも尤。亦。事。小。こ。そ。然。し。も。枉。を。け。漫。ま。る。よ。り。
古。此。神。の。御。事。は。鹿。略。小。あり。行。た。り。神。等。は。坐。ま。さ。ぬ。と。隠。ろ。ひ。ま。し。高。此。卑
れ。悉。小。彼。佛。と。小。蕃。神。を。し。上。亦。貴。物。と。め。て。敬。ひ。世。人。の。心。拙。く。女。と。さ。く。ぞ
成。れ。り。依。是。は。枉。物。小。相。率。り。相。口。會。を。て。依。り。て。最。も。悲。く。慨。き。事。小。極。み
あり。け。り。然。る。小。時。や。來。小。む。天文。を。称。し。御。世。小。東。照。神。祖。命。生。れ。出。み。ひ。天。正
慶。長。と。云。し。御。世。頃。小。專。と。天。皇。小。御。為。り。天。下。を。鎮。め。み。御。業。小。勞。う。せ
み。ひ。服。を。ぬ。人。を。ば。御。仁。惠。を。以。て。事。向。め。み。ひ。暴。ら。る。者。等。を。ハ。武。き。御。威
稜。を。振。ひ。て。征。伐。め。み。ひ。將。小。皇。典。等。を。召。問。し。て。次。小。古。の。御。式。小。復。し。
廢。れ。る。神。事。を。も。興。し。み。ひ。て。天。の。下。よ。く。治。り。目。出。小。御。代。と。は。成。り。り。
さ。依。大。き。御。舉。成。し。輔。佐。申。さ。れ。る。臣。小。ち。は。最。多。か。る。中。小。林。羅。山。先。生。ハ。も
文。道。の。事。小。仕。奉。ら。る。程。小。神。社。考。ち。小。書。を。著。し。て。神。社。の。縁。起。を。述。べ。彼。佛

○古今妖魅考縁起
法の異端ある由を論ひ。其中にも天狗ちふ妖魁の本因を考明されあるハ。古今小比ねく傑する説小あも有る。殊小此ふみ早くより板本と成て。世小弘まき版を。高祀も卑きも悉く。此説子信奉るべくあり。最も愛ふ。此事ねり。然る小此書はしも。王公大人に聞えむとて。其文躰子記さむ。されむ。庶人の心訥きは。悟得てや有む。かく學の道は開けつる御代。小彼。左道説小誑され。或も君上の命令小戻り。有るは家の産業を弃て。各もく先祖の大本さる。神祇をし。鹿略されし奉依者。世より多く有めるハ。甚く歎うはしく。傍い。此事より。爰小我父はも。早くも此先生の此説をし。深く信ひみへる。餘り。い。う。で。此を。天下の大凡人に容易く読得べく書成し。は。その徴と。な。版べき事等。浅手近き軍物語を始め。數け書等より抄出して。參考へ。詳し解悟してむと。年ほ孫く心留置れ。る。甚多小成ぬるを。此文政の五年と云る。年小。其を大抵小記し。序を。自。此考。按をも添られ。版小。三百葉許

と。成。於。れ。ハ。書。名。を。も。か。く。負。せ。て。側。子。さ。し。置。れ。る。を。親。き。教。子。も。一。速。く。乞。申。て。見。め。て。扱。く。同。學。の。兄。弟。小。も。知。ら。せ。て。し。う。と。彼。刊。本。有。る。著。述。書。目。小。載。つ。版。よ。め。弟。子。等。ハ。更。小。も。云。な。れ。此。方。彼。方。此。人。より。い。う。む。く。と。急。ぐ。版。其。答。へ。小。倦。を。つ。る。迫。あり。爰。小。已。申。し。版。を。か。く。入。り。此。を。申。し。を。敏。く。清。書。を。て。見。せ。申。さ。は。や。と。願。申。せ。と。猶。よ。く。考。正。し。て。後。小。こ。そ。と。父。の。許。し。み。ざ。れ。ハ。さ。て。過。お。る。を。今。年。ま。く。強。て。こ。い。申。て。か。く。淨。写。を。て。我。黨。の。人。小。見。る。事。と。は。成。了。ぬ。か。く。て。此。論。説。の。次。第。を。云。む。小。先。始。小。天。狗。と。小。名。義。を。辨。へ。む。其。物。の。形。状。を。和。漢。の。書。小。證。し。考。へ。日。本。紀。の。訓。小。依。て。天。狗。ち。小。物。此。事。も。及。び。夫。より。彼。佛。祖。釈。迦。法。師。が。立。つ。る。戒。此。許。多。有。り。て。其。違。ハ。む。者。は。盡。小。魔。道。子。墮。つ。と。ふ。其。道。此。法。有。る。を。世。の。僧。等。の。そ。成。脱。れ。る。は。一。人。も。有。ま。じ。た。由。を。説。明。され。將。その。物。と。も。小。三。熱。此。苦。と。云。な。れ。有。る。因。縁。を。け。へ。天。堂。地。獄。の。躰。相。種。々。此。苦。患。有。る。事。を。も。辨。へ。閻。魔。地。藏。と。い。ふ。鬼。の。由。來。序。小。三。途。河。此。老。婆。の。事。小。も

ねらひ。夫よ正西方極樂浄土の往生といふ事までを解呈して。然る事ともは
 悉く。佛祖の幻説なりしより。出来たる事なる由。博く諸經論を引て考注
 され。終に小源平盛衰記あり。開発源大夫住吉と名告ゆる者の語。あゝ太平記
 あり。雲景が未來記と云物の説などを摘出して。貢高邪慢此所為の者。悉く
 魔縁にて。果をみる天狗道小落べき事。我古学の輩といへども。其心を
 皆同じ悪道小落べき由縁までを。委く辨へ論はせり。斯てこれ神社考ハ先生
 の趣意此如く。王公大人は。敏く聞召しぬふ修られ。今申出る小及む。此の書
 はし。庶人のよく読み孰く味いて。佛道の異端ある由を辨へ。地獄極樂あると云は
 皆これ釈魔に。変現して見ゆる態を。心を得て。少くも惑ふ事なく。魂に柱
 を太く固く衝立て。我本來の正道を守らめむ。為よ。かく著述せり。見む人此
 意を得てよ。かく云時を。文政此十年といふ年。此四月。平山田鐵胤

古今妖魅考一之卷

7.3.29



平篤胤輯考

人門

- 備中國 堀家政富
- 武藏國 藤田勝誠
- 遠江國 中村真幸

校同



○敘言

林羅山先生此神社考小。我邦自古稱天狗者多矣。皆靈鬼之
 較著者。是非星之義也。或爲佛菩薩相。或爲鬼神貌。時時出現。
 或爲狐。或爲鳩。飛行。或爲童。或爲僧。爲山伏。出于人間。其說曰。
 見人福。則轉爲禍。遇世治。則復爲亂。或發火災。或起鬪諍。沙門
 中有慢心。及怨怒者。多入天狗之中。所謂傳教弘法。慈覺。智證

等是也と記し。

但し此を大意を引約えて擧ぐられたるを委しくは本書小就て見るべき。

此餘も古く名僧大徳に聞有し僧等此名を多く擧られ
る戎庸人は甚く驚く事あると。

但し神社考を非爲庸人而言は既す序も本文も
も記されし僧等甚く右の説を惡みて神佛冥應論神
社考私評論同辨疑ある云ふ書等撰著して辨了れど
少りも破し得る説れし。

博聞絶倫ある先生に語し有れを決めて確證有て言

し説と己は深く信する心。身自も正しな證を見得て
そを年おろ讀む書どもれ。其證と成るべき事實成ら
て鈔録せるが甚多く成しうは其を記し整す少り考按を
も書加ふれむ所思加く名負て得有ましく成ふと
故ま於始を天狗といふ名義の事よと論ひ起し於
羅山先生に語す。我邦にて天狗と稱すは。靈鬼に較著
みて。星の義小非と云は。星小天狗と云ふが有れ
世す天狗といふも。其星の義小非と云ふ意あり。然
予孰く按ゆ。其物は異あるも。天狗を稱ふ名は。かの天
星といふ化物の名を取れるるを有る。其をま於所謂天狗

星此事は。諸越の史記漢書晉書あど云ふ史等子。天狗狀如大
奔星有聲。其下止地類狗所墮望之如火光。炎々衝天。まふ西北
有三大星如日狀。名曰天狗。天狗出則人相食。はと天狗如大流
星。色黃有聲。其止地類狗所墮望之如火光。炎々衝天。其上銳其
下圓如數頃田。見則流血千里。破軍殺將。まふ流星有光。見人面
墜有聲。若有足者名曰天狗。其色白。其中黃黃如遺火狀。主候兵
討賊。見則四方相射。千里破軍殺將。人相食。所往之鄉有流血。其
君失地。兵大起。國易政。あど見えあて。
上件の文どもは。目易く引約めて舉されむ。少々本書と異
小見ゆる處。え有はし。

此を合せて思ふ。此化物をも。大凡の狀狗小類て。頭銳。口喙
あて。人面小も見成。あて。天よと墜る故。天狗と名負。あて
也。りり。斯て此物犬の如く横行し。あて。人此如く豎行も。あて
物と見えあて。

そは後の物あて。今此清代小成。述異記をいふ書。よ。
康熙壬子四月廿二日黎明。錢唐西北鄉有孫姓者。門未啓。鄰
人夙起。見孫屋脊上有一物。似狗而人立。頭銳。喙上半身赤色。
腰以下青如靛。尾如箕。長數尺。驚呼孫告之。甫開門。其物騰上
雲際。忽聲發如霹靂。委蛇屈曲。向西南而去也。上火光迸烈。如
箕之掃天。移時乃息。數十里內皆聞其聲。亦有仰見其光者。所

謂天狗墜地如雷也。甲寅有逆藩之乱と見えたり。此を已い
まふ其本書字見ざれど。村瀬之熙が執苑日涉といふ書に
引くるを再擧ぐる形也。亦漢籍に此化物の餘り龍をも
鳥をもほく石をけり。天狗といひし事あり。其を此に
要れき事あり得辨へば。此餘り仙を天狗といふ事あり
也。其を下小辨ふべし。

儲おの化物也。漢人を星に墜て化する物也。思へる趣りて上
小擧ぐる史等小然云する耳あらば。昭明下爲天狗所下兵起
血流。昭明星也とも。或も太白星散爲天狗とも云ふれども。眞
の星に墜下るはき由無れ也。

漢人はやもにまて。星に下ると云説を云ども。眞の星を墜
下れと云は物なり非也。此をよく天文の事考學びて知べし。
此を異ある妖物の態と形を星の如く見らるる。博聞録に
陰山有獸焉。其形如狸而白首。噉蛇名之天狗と云ひ。

上小擧ぐる書等には。狗小類ると云する。此録よを狸
如ると云ふは違へる。似るに似る。共る大凡の状を云へ
る形れ也。然るに似るとも。鳥に似るとも云ひ給べし。拘
るは可うらば。

山海經にも此説を記して。其光飛天流而爲星。長數十丈。其疾
如風。其聲如雷。其光如電と有れ也。此妖獸の態と見えたり。

然るを上より引くる史等小。此を星といふ所依也。流星の如く
光をて飛ぶ故。星と思ひ過りて。種々雷同しける説ども
を云へる。て。決めて星の化ふる小非也。彼妖獸の化て星
の如く見ゆる也。藤井高尚説。山海經小。天門山有赤
犬。名曰天狗。其光飛天流而為星。其聲如雷と見え。五雜俎小。
俗云。天狗所止。輒夜食人家小兒。故婦女嬰兒多忌之とあり。
此を山に住む怪き物の出て。空をとび行き。大なる流星の
形を見ゆまど。眞此星あらぬ故。高く聲を立て。止まる處
小ては。人家の兒をとて食ふとゆるは。樹神山鬼の類あり。
和名抄。樹神山鬼。或こごまを云。此木靈也。類を。天狗と

も云へる。小多。同じ様ある物れまむ。物語ふみ小は。天狗の
あまを並ても云。と。其天狗説。いひしは然る説あり。
つて皇國にて。此物の現れ。舒明天皇紀。九年二月戊
寅。大星從東流西。便有音似雷。時人曰。流星之音。亦曰地雷。於是
僧旻曰。非流星。是天狗也。其吠聲似雷耳と有る。古き始。て。此
年果して東夷に乱起。上毛野君形名といふ人を將
軍とちて討しめ給へる。小夷の軍強くて御軍敗れりる。形
名。君の妻いよく慨みて。女軍を起し。夷に軍を大敗。て。悉
く虜小為とて。死。

戊寅は二十三日あり。僧旻は元あり。我法師にて有し。うば。

早く史記漢書など此説を知居て。此時かく天狗ありとは。断れるあらむ。

信^イ和漢とも小。此物の出^イる時^イを。かく兵乱ある事^イを。甚も妖^イくし^イた物^イなり。

神世^イ聞えし香^イく背男^イといふ星神^イを。既^イく健葉^イ槌^イ神^イ子^イ誅^イはま^イる^イ^イ。此^イを若^イくは。其流^イ裔^イの物^イ小^イ非^イざ^イ^イ。香^イく背男^イを^イ決^イ免^イて。大^イ白^イ金^イ星^イ小^イ住^イる神^イある^イべき由^イは。古^イ史^イ傳^イふ云^イる如^イくある^イ。小^イ漢^イ籍^イは。大^イ白^イ星^イ散^イ為^イ天^イ狗^イと^イある^イを。由^イ有^イら^イなり。但^イし此^イを庸^イ人^イの爲^イ小^イい^イふ言^イなり^イ交^イ。

らて御紀^イあり天狗^イ字^イは^イ傍^イり。阿^イ麻^イ都^イ伎^イ都^イ祢^イと^イ付^イる^イは。私^イ記

も同訓^イあり。古^イ記^イ博士^イの^イ深^イく思^イひて^イ付^イる^イ訓^イみて。此^イを皇國^イ小^イて天狗^イとい^イひ習^イへる物^イ也。妖^イくし^イた状^イの。天狐^イとい^イふ物の趣^イは類^イある^イ故^イに^イ依^イる^イ。

埃囊抄^イ天狗^イ名目^イ事^イとい^イふ條^イは。天狗^イ也^イも天狐^イと^イも書^イて通^イはし^イ用^イふ。然^イま^イは日本^イ紀^イ小^イて天狗^イと^イ書^イて。ア^イマ^イツ^イク^イツ^イネ^イと訓^イめて。字^イを^イ狗^イと^イ訓^イは^イク^イツ^イネ^イあり。是^イ通^イへる事^イを^イ顯^イる^イれ^イと云^イへ^イま^イは。當^イ時^イク^イツ^イネ^イを^イ訓^イし^イ本^イも有^イしと聞^イえ^イる^イ。舊^イく^イ狐^イを^イ久^イ都^イ祢^イと^イも云^イり^イ也。

然^イるは天狐^イとい^イふ物^イの所^イ爲^イを。廣^イ異^イ記^イとい^イふ漢^イ籍^イは。唐^イ汗^イ陽^イ令^イ某^イ在^イ官^イ忽^イ云^イ欲^イ出^イ家^イ念^イ誦^イ經^イ至^イ月^イ餘^イ有^イ五^イ色^イ雲^イ生^イ其^イ舍^イ。又^イ見^イ菩

薩坐獅子。上呼令歎嗟曰。發心弘大。當得上果。宜堅固自保。無為退敗耳。因爾飛去。令因禪坐。閉門不食。六七日。家人憂恐。損壽會道士公遠。自蜀之京。途令子請問其故。公遠笑曰。此是天狐耳。因與書數符。當愈。令子投符井中。遂開門。見父餓憊。逼令吞符。忽爾明悟。不復論修道事。

上件の事ども。今昔物語集。宇治拾遺物語。あど小。美濃國伊吹山。此聖人が許へ。佛菩薩來迎の相を現じて來れる。天狗の所為。よいと能合。予り。其々第三卷。小引。くる文を見て。知べし。まゝ。羅公遠が事。續谷響集。五卷。も見えぬ。

後數歲罷官。過家家。素郊居。令暇日倚杖。出門遙見桑林下。有貴

人自南方來。前後十餘騎。狀如王者。令入門避之。騎尋至。門通曰。劉成謁令。令甚驚愕。既見升堂。坐謂令曰。蒙賜婚姻。敢不拜命。令有室女。年十六歲矣。令曰。未相識。何嘗有婚姻。成曰。不許婚事。亦易耳。以右手掣口而立。令宅須臾震動。井廁交流。百物飄蕩。令不得已。許之。婚期尅。翌日。成親後。恒在宅。資以饒益也。他日。令子詣京。見公遠。公遠曰。此狐舊日。無能。今已善符錄。吾所不能及。令子懇請。公遠奏請。行尋至所居。于令宅外。餘步設壇。劉成策杖。至壇所。罵曰。汝何為往來。靡所忌憚。公遠法成。求與交戰。成坐令門。公遠坐壇。乃以物擊成。成仆于地。久之方起。亦以物擊公遠。公遠亦仆。如成焉。如是往返數十。公遠忽謂弟子曰。彼擊余。殪爾。宜大臨。

吾當以神法縛之。及其擊也。公遠仆地。弟子大哭。成喜不為之備。公遠使神往擊之。成大戰。恐自言力竭。變成老狐。

玄光法師が擬山海經にも此説を擧て。其首書小善符録。而非其人。則去劉成間不容髮矣。世俗奉而為神聖者。吁可悲。云予は卓見あり。抑漢土の道士といふ者此態を大旨皇國の會易家此態小等しき物あり。其使いゆる神と云も。安倍晴明が使へる。式神といふ物の類うぞ有べき。此も事の因小云ふのみなり。

公遠既起以坐具撲狐。裹之以大袋。乘驛還都。玄宗視之。以為歡笑。公遠白曰。此是天狐。不可得殺。宜流之東裔耳。書符流于新羅。

狐持符飛去。今新羅有劉成神。土人敬事之。とあり。

廣異記の本文。これら主要とれき文を引約めて擧ぐり。因小いふ元亨釈書小。新羅明神者。天安二年。圓珍師泛舶自唐歸。洋中忽有老翁。現船舷曰。我是新羅國之神也。誓護持師。教法。至慈氏下生。語已不見。珍入京。將傳來教籍。藏尚書省。時海上翁來曰。此所不堪。置經書。是日域中有一勝地。我已先相攸。師聞。官建院宇。度此典籍。又佛法是王法之治具也。佛法若衰。王法亦衰。語已形隱。珍歸。睿山至山王院。時山王明神現形。曰。傳來經書。宜藏此所。新羅明神又出曰。此地來世必有喧爭。不可置也。南行數里。是為勝處。珍乃與新羅山王二神。到滋賀郡。

園城寺。新羅明神語。珍曰。我上居寺之北野。時百千眷屬倏來。圍繞唯珍獨見。他人不知。自此新羅明神。威靈益顯。とあり。此事釈書にみあらば。多くの古書に見ゆるが。新羅國に神と名告ぐるも。圓珍に説くる妄説の趣とを思ふ。決めて彼劉成神あらむと覺也。然依を俗に學者とちの説に。新羅明神を。素盞鳥尊の化現やと云へるも有るは。餘り小事字辨へざる言なり。慈氏とは弥勒といふ佛に事れるが。其下生とは釋迦佛在世の時小記を受てよ。五十六億七千萬歳の後小世よ出て。正覺を成じと云ふ釈家の幻説あるを。素盞鳥尊にいうて。其を信じて。佛法を守り給む。佛法

是王法之治具也。云々あと云へるも。殊に天狐の誑惑説あり。然まは天狗小。阿麻都伎都祢也。訓を付ふるは。皇國にて天狗と云ひ習へる物の所為此。かの天狐といふ物に所為は類する故。然よみくる事疑れく思也。

然らばは字の俤小。アマツイヌ也。訓はき小。アマツキツネと訓るを。然る事。思はばハ。得よむまじ。此訓ある也や。まゝ仙家此説を攷ふる。まは抱朴子對俗篇小。彭祖言古之得僊者。或身生羽翼。变化飛行。失入之本。更受異形。有似雀之爲。蛤。雉之爲。蜃。非人道也。まゝ至理篇小。或有邪魅山精。侵犯人家。以瓦石擲人。以火燒人。屋舍。或形見往來。或但聞其聲音言語と

見えまゝ登渉篇小。萬物之老者其精悉能假託人形以眩惑人目。而常試入唯不能於鏡中易其真形耳。是以古之入山道士皆以明鏡徑九寸已上懸於背後則老魅不敢近人といひ。但し彭祖がいたる神仙の事迹を粗皇神の道に等しく。彼天狐老魅あといへ流類とは甚く異形れ也。其形状の稍似あるは小姑く徴し記せるあり。

は山人此説を傳聞する小。魑魅といひ。天狗と世小いふ物の本は鷲ウレトビ鴛ウツ狐キツネを更小も云に餘の鳥獸も數百千歳を経ては鳥を兩翼より手茂生じ。本よ此兩足小肉を生じて立ち獸は前足小翼ツギを生じ。異形あらう。稍人ヤに似たる形カタチと化て豎行

し。共小飛行するが中ナカ小翼ツギれくて飛行する流も有と聞キコふ。其中ナカも雷獸を狸タヌキに似て空中を翔カる物あれ也。上小引る山海經博聞錄あとの説小符カひてきあ也。星の如く光を見ゆる天狗也。此物此年經トシヘするが化ナリ多流あらむも知べから也。其飛ぶ時トキは雷の如き聲を發せといふも。由有て通え。杜甫が天狗賦小。夫何天狗兮氣獨神秀。色似狡狴テ小如猿狖。忽不樂トク雖レ方夫不敢前兮。非胡人焉能知其去就と云へるも。猛獸と通えとて。此を仙境異聞とて。別小聞書キコガキせる物數卷あり。其を見て知るべし。

此小就て思ふ。古の博士ハカセも若くは天狗を、狐も化る物ぞといふ説の舊フルく有しを加へるも聞知りて、彼訓カノヨミを付しめらむも知はらむ。

谷川士清の言小源氏。てむぐまふまと云子依を。魑魅チミ此類タビひて、或を老鷲の化る物といひ。日本紀の訓小よめて、天狐とも物カ子書カた。天狐小。天狐地狐人狐ヒキ此別有て。今いふ天狗を元よて天狐也と云へて。四八目類函小。狐千歳與天通ス爲天狐と見ゆれ。然も有シ。獸カモノひてはまみ狸ヌキといふ物を天狗也云へり。士清が言ふ。老鷲の化る依と云ふ説。まゝ天狗を元よて天狐ありと云へる説を。何人の

説あらむ。古人の説と聞ゆるが。仙家の説カ+符カ+ひて通キコ也。由て士清が謂イゆる。地狐人狐也云ふ物此事を知らずと。天狗地狗也並べて云子依事を。愚管抄七卷子。後鳥羽天皇の武家を悪キラひ給ふ事を。諫イサめ奉ると。記出カキイデりむと思オホゆる處小。攝籙と武士をカ一ツ小れして。文武兼行して世を守り。君を後見ウシロミ參らマべき子。成ぬるナり也見ゆるあり。是レを一定八幡大菩薩の御計ハカラひり。天狗地狗のわざうと。濃フカく疑ウタガふべしと。何ナニれ。天狗とは元來モトヨリいなる。天狗をいひ。地狗とは後小僧徒ホウソウらガ化カむるを云子依カもや。詳サタカあらむ。はら抱朴子ホウハクシ。物之老オシ者多シ知チ。率ネ皆ネ深シ藏シ遠ト處ス。故ニ人少ニ有リ見ル之ヲ耳。

千歳之鳥万歳之禽。皆人面而鳥身也。と見え。仙家の説。天狗
ちふ物の本を。鳥獸を依が。數百歳を履て兩翼を生じ。飛行を
と云ふを。上り引く。漢籍等小云へる。天狗小翼有りと聞え
ざ依を。中小は翼あくて飛行を依も有。と云ふ物ある依し。
但し天狗とこそ云は孫。正し世よい小天狗の状。て翼あ
る物。漢土にも在る。と。抱朴子の説。て炳く。ま。下。小舉
る依。尚書故實といぬ書小。記せる事を見て知べし。
儲ま。世り天狗を云ふ。上り論へ依種。の物。化。依。は
更。あ。羅山先生の説。此如く。多。くは僧山伏。あ。どの化。依。鬼
を云ふ。何故。其を天狗といひ。初。む。と考。ふる。小。高鼻長喙

小。頭。を。加。の。天。狗。小。ち。び。似。て。山。子。住。み。世。り。災。異。成。る。以。こ
も。あ。れ。天。狗。小。類。と。れ。を。あ。り。後。白。河。上。皇。小。見。奉。り。て。開。發
源。大。夫。と。名。告。白。せ。る。物。の。語。り。僧。等。の。化。ま。る。靈。鬼。の。事。を。語
り。て。其。形。頭。を。天。狗。み。て。左。右。に。羽。生。と。有。を。思。ふ。依。し。
此。を。源。平。盛。衰。記。に。見。し。る。事。れ。る。が。世。小。い。ふ。天。狗。は。事。成。
正。や。り。小。語。り。傳。へ。し。第。四。卷。小。舉。て。少。り。注。せ。る。を。見。よ。
頭。を。天。狗。り。て。云。く。を。言。ふ。依。ま。て。元。よ。り。天。狗。と。い。ふ。物。有。り。て。
僧。徒。の。化。れ。る。靈。鬼。の。其。小。似。し。る。故。り。其。名。を。取。て。名。と。せ。る
事。は。知。ら。ま。し。と。す。

埃囊抄小。諸道は長者。諸宗の行者。慢心小依て。天狗を成す

るは其名を同じきと。種類各別あるを云へるは實然る
説あり。まゝ同書ふ。八坂の寂仙上人遍融。七天狗繪といふ
事を書れり。と有る。寂仙上人といふを。何頃の僧れらむ。
七天狗とは何くぞや。此繪巻今も傳れるや。見ま欲れ物
あり。俗小事に成が。此事を。八天狗を使ひても。成が。か
らむ。あやめり。えし。斯る物。小由ある言ふや。まゝ。京に愛
宕山よ上りて見し。かむ。宮の後。八天狗社と云ふ。ありき。
後。小愛宕山。大権現。強敵退散法といふ物を見る。小。太郎坊。
火乱坊。三密坊。光林坊。天南坊。普賢坊。觀喜坊。東金坊。あとい
ふ。天狗の名とも見え。是等を祭れるや。

斯れば法師とち化せる鬼を。舊く天狗と云ひ來り。れと。眞
の天狗。小非也。其身。翼生じて。多くは山に住む。魑魅の類
小入る。みて。釋魔と云ふべき物。ふそ有る。

漢籍尚書故實。といふ物。章仇兼瓊。鎮蜀日。佛寺設大會。百
戲在庭。有十歲童兒。舞竿杪。忽有物。狀如鷓鴣。掠之而去。群衆
大駭。因而罷樂。後數日。其父母見在高塔之上。梯而取之。則神
彩如癡。久之。方語云。見如壁畫。飛天夜叉者。將入塔中。日飼果
實。飲饌之味。亦不知其所自。旬日。方精心如初。とあり。此を天
狗とは無れと。正しく翼有し。天狗。小て。魑魅の類と見也。第
二卷。小論へる。東大寺の開基。良辨を掠去れる。鷲も。此類の

釋魔あり。先達セムダチも多く。漢土カンチも世々の如き。天狗も有といふ證アケシ。この尚書故實の説を引く。谷川士清云く。五朝小説ゴカウに載る。飛天夜叉といふ物。塔より下りて婦人を捉む。形鳥ツクリに似ると云ひ。廣西通志クワンシトウシ。一人約を盗む。長二丈面潤ヒロさ三尺餘り。長さは小倍を被髮鳥喙シヅラ背小二翼あり。と云ふ物。世々の如き。此もいづる天狗に似る物あり。其治鳥チウといふ物あり。此もいづる天狗に似る物あり。其を本草綱目ボウソウコウモクに。越地淡山ウチノチノタンサン有之。大如鳩青色。穿樹ウチノキ作窠ウチノキ大如五六升器。口徑數寸。飾以土。赤白相間ウチノキ狀如射侯。伐木者見此樹ウチノキ即避之。犯之則能役虎害人。燒人廬舍。白日見之鳥形也。夜

聞其鳴ウチノキ鳥聲也。或作人形長三尺。入澗中取蟹。就人間火炙食。山人謂之越祀之祖とあり。此も一種の妖物ウチノキにて。正ウチノキ天狗の類と見え。寺嶋良安云く。先輩ウチノキ云。治鳥乃本朝所謂天狗之類矣。羅山文集云。日光山有天狗。好棲息于長杉。猶是愛宕山大杉。榮術太郎之所居之類也。欵蓋指鬼類而言也。といひ。北國能登海濱有天狗爪。往ウチノキ拾取之。大二寸許。末尖微反。色潤白。如小猪牙。而非牙。全爪之類也。疑此北海大蟹之爪也。欵若夫天狗之爪者。可有處々淡山中。何有海邊耶。とも云へり。天狗の爪と稱する物を。何物の爪といふ事いまいふ思ひ得。交。

抑釋魔といふ稱を佛籍に有るしや無るしや今覺えん。若無
らむは余が新設ある名と知れし。然るはま於天竺にて
魔と云ひ魔羅と云ふ語意を考めり。固有の梵語にて自然
小して靈異ある物をさして云ふ稱あり。然依を惡き物のま
と聞ゆるは如何といふ。佛道は相反して其道の妨げと
爲す。障りを作す物なきは彼道より良らぬ物故。佛者よ
悪く言貶せるなり。其を三藏法數十魔の下。華嚴經疏を引
て。魔梵語具云魔羅華言能奪命。謂能奪智慧之命。又翻作障。能
於修道之人而作障難故也。
按玄奘の論大論。魔羅或言惡者。多愛欲害出世善根故

也とも有る。而て俗に男根をマウラと云ふも。佛道より賤め
る名を思ふ。然らば。此をもマウラといふ語の約
まれば。固より正し。古言あるが。男根れみあらば女
會ふも通る名れり。其をマウラは眞心にて。彼處を眞情に
凝結する處ある故。專と稱ふ名あり。ナラフ云ふ梵語も
同義と聞えり。猶委くは古史傳あり。印度藏志に説注せ
るを見る所し。

一 蘊魔。謂色受想行識五蘊爲魔。蓋貪著五蘊起惑造業也。
五蘊といふ事故。經論とも小説る様いと云痛く紛くしけ
き也。語易く言はる。此身の地水火風の四大。および四大の

造^ナせる色を。色蘊と名^{ナツ}く。百八煩惱等^ナを身^ナ小^ナ受^ナ依^ナ城^ナ。受蘊と名^{ナツ}く。小大無量の想^ナ和合^ナるを。想蘊と名^{ナツ}く。好醜^ナを因^ナて。貪欲嗔恚等^ナ此心^ナを起^ナし。善惡諸行^ナを作^ナを行^ナ蘊と名^{ナツ}く。眼耳鼻舌身意の識^ナを以^テて。無量^ナを分別心^ナ起^ナる故^ナ。識蘊と名^{ナツ}く。是^ナ五蘊^ナあり。蘊^ナを積集^ナの義^ナとも。蓋覆^ナ此義^ナとも云^ヒて。色受想行識は。よく眞性を蓋覆^ナに云^フ義^ナをもて。五蘊と號^ナへ^レば。此五蘊^ナを皆空^ナありと明悟^ナして。貪著^ナせざる故^ナ。五蘊實相^ナといふ。實相^ナは眞如無妄の理^ナと云^フ。五蘊^ナを皆空^ナと見る。おき眞實の佛道^ナあるを。其^ナ小^ナ貪著^ナして惑^ナを起^ナし。業^ナを造^ナれむ。五蘊^ナはやがて魔^ナといふ義^ナも。蘊魔^ナと名^{ナツ}けざるべし。

二煩惱魔^ナ。謂^ナ一切煩惱之惑^ナ爲^ナ魔^ナ。蓋貪著^ナ五蘊^ナ起^ナ諸煩惱^ナ也。

按^ナぢ^ナゆ^ナ五塵^ナとは。色聲香味觸^ナをいふ。また大論^ナに。謂^ナ百八煩惱^ナ等^ナ分別^ナ。八萬四千^ナ諸煩惱^ナとあり。五蘊^ナを三藏法^ナ數^ナの法界次第^ナを引^テて。眼^ナ所^ナ見^ナ青黃赤白黑^ナ。及^ナ男女形貌^ナ等^ナ色^ナ。是^ナ名^{ナツ}色塵^ナ。耳^ナ所^ナ聞^ナ絲竹環珮^ナ之聲^ナ。及^ナ男女歌詠^ナ等^ナ聲^ナ。是^ナ名^{ナツ}聲塵^ナ。鼻^ナ所^ナ嗅^ナ梅檀沈水^ナ飲食^ナ。及^ナ男女身分^ナ所^ナ有^ナ香^ナ等^ナ。是^ナ名^{ナツ}香塵^ナ。舌^ナ所^ナ嘗^ナ種種^ナ飲食^ナ肴饍^ナ美味^ナ等^ナ。是^ナ名^{ナツ}味塵^ナ。身^ナ所^ナ觸^ナ男女身分^ナ柔輒^ナ細滑^ナ。及^ナ上妙衣服^ナ等^ナ。是^ナ名^{ナツ}觸塵^ナ。塵^ナ即^ナ垢染^ナ之義^ナ。此五塵^ナ能^ナ染^ナ汚^ナ眞性^ナ故^ナ也とあり。此五塵^ナ小^ナ貪著^ナするゆ^ニ。諸煩惱^ナ起^ナる。其^ナを煩惱魔^ナと云^フ也^ナなり。

三業魔。謂一切惡業爲魔。蓋殺盜淫妄諸罪也。四心魔。謂一切我慢之心爲魔。蓋心懷貢高常生憍慢也。五死魔。謂人壽盡命終爲魔。蓋業報已畢捨離現生之處也。六天魔。謂欲界第六他化自在天爲魔。蓋此天爲欲界主。見人修道以爲失我眷屬。空我宮殿。卽興魔事。惱亂行者也。

按ぶる小同書四魔の下小。瑜珈論を引きて。天魔若人欲超越三界生死。作障礙發起種種擾亂之事。令不得成就と云云。る。此自在天といふ物を。世に第六天魔王とも云ふ物なり。て。此を魔としも言へるは。佛道を惡み嫌ふ由りて負さるる。れまど。佛道よるよる然も云を免。他よるは然しも憎み云

修き物小非交。然るは此天。佛書とも小云ずる趣を考ふ。依小。子孫を相續して人道を行むむせざる物あり。然る小佛法を其を魔事と立たる道あり。其道は違へ依故に魔といふ。依ありと。自在天よりは。佛道をこそ魔道と云修りれ。然るは子孫を斷絶して。人道は違へむれ。但し此は庸人の爲り。いふ言は非交りし。

七善根魔。謂著所修一切善法爲魔。蓋修行之人或得一善。卽生取著之心。更不加修也。八三昧魔。謂著所得禪定爲魔。蓋修禪之人得一三昧。久味耽著。不求昇進也。

佛法者小。或を一經に依り。或一偈一呪小より。或は一佛一

并一天一明王を採て外を顧ざる者甚多有り。此文小依ま
ば善根魔の人あり。三昧を梵語なり。譯して正定と言ふ。さ
て禪家此學匠也。此の如き人甚多し。即三昧魔の人あり。
九善知識魔。謂慳吝於法爲魔。蓋於一切諸法起執著心。不能開
導於他也。十菩提法智魔。謂著一切法而爲魔。蓋修行之人於菩
提之法起智執著堅守不捨也。

諸宗の學匠小かく依人甚多し。即善智識魔の人あり。菩提
を梵語あり。譯して道と言ふ。佛道修行れ人々を普く觀る
小。此魔を脱れざる人々多く有はしく思也。

はと翻譯名義集小。大論。瑜珈論などを引きて。四種魔を明し。

今謂煩惱魔。是生死因也。五衆魔。死魔。是生死果也。天魔。是生死
緣也と云ひ。

五衆魔とは。上小いちちの蘊魔あり。れを此餘小。愛魔。婬魔。
罪魔。行魔。惱魔。と云ふ目あきと。皆上ある十魔は具れり
故り。今更小記し出せぬむ。

魔字は古譯の經論に。石小从磨字を書しを。梁武帝が時小。
磨を能く人を悩ませむ。字或鬼を从磨して。作れる由言也。
上。件三藏法數。名義集とも。此小用なき文を省きて。目易
く記せり。具は本書小就て見るべし。

葬喪記。棺前設燎火以去諸魔。此謂阿良知氣と有り。然れを

魔を呼し古言も有り也。されど他書小見ざる言れまは猶よ
く考ふ傍し。此て魔の本説也。上より引ふる佛書ども此説の如
あれど。釋子と成りて。其道より入らむるは。其本教の如く。十
魔の紐を餘波なく截捨て。生死を出べき事ある也。其を人
る者れ。決めて成得ました所爲あり。人此決めて成し得ざる
此れを成志免むとい。是をやがて魔道を依故。古今の釈子
悉く生死因する煩惱魔を更なり。生死果する蘊魔死魔をも
去敢て。此より去畢むては魔を脱ぎ。況て其戒の多端ある。菩
薩戒を姑くわきて。沙弥の十戒を事ふも非縁と。

其にら佛書ども小。一殺生戒。常念有情皆惜身命。當憐愍慎

勿傷。二偷盜戒。物各有主。雖一針一草亦不當攘竊。三不婬戒。
清淨自守。不犯色欲。四妄語戒。言說誠實。不以虛言誑他。五飲
酒戒。酒能昏神。乱性增長愚癡。當絶飲。六離高廣大牀戒。所坐
之牀。高不過尺六。廣不過四尺。若過此量。則不可坐。七離花鬘
等戒。不著花鬘。瓔珞。不用香油塗身。八離歌舞等戒。不自歌舞。
乃不觀聽。不蓄樂器。九離金寶物戒。金銀錢寶。不當蓄積。亦不
許手執。十離非食時戒。佛制午時為食時。若過午。則不當食。と
有れむ。形を容易に持するべき事小を非也。
比丘小至しては。具足戒とて二百五十戒。比丘尼小三百五十
戒あり。

夫の諸戒を鏡規とて。諸宗の祖師聖人と云。徇く僧とち。
古今に僧尼を照し観る。よく其法規小叶へたと見ゆる
は。吾いまづ此を見。近くを名義集。釈氏要覽。大藏法數
とふ。記せる戒の處を讀み。古今に僧尼の行狀小合せ見て
知る。後し。

此餘に誠めし。依禁戒に條くは。限なく多うれど。此禁を持ち
しるも。彼戒を得持し。彼禁を持ちしるも。此戒を持ち敢て
破戒小坐し。常小口實とせる。幻説。やがて因せあり。然る妖魔
の果を感得し。自法やがて自繩とありて自縛し。自業の自刑
を自得して。自造の惡道小歸し。妖魔の部屬と成こと。佛子

と云へども。人子ある。甚も悲き因果ありかし。

金剛三昧經に。自念起相。自繫縛。以繫縛。故則是地獄。雖非是
有。而令受者受。彼苦云くと有る。即此義を明せる説あり。
此を尋常に靈鬼とは。其因縁異ふ。佛道有し以來。やがて
其道小よして化す。其事を行ふ妖物あれむ。彼道小用ふる魔
字を用ひて。釋魔を稱ふあり。然るは此。或舊く。天魔とも天
狗とも稱へむとも。天魔と云ふ。上論へる如き物あれむ。釋
子の化れる魔の號ふを當らむ。まづ此を天狗と云ふ。依事も。
佛經等小無れむあり。其は早く無住法師が砂石集。天狗と
云ふ。と。聖教に慥なる文を見及む。先徳の魔鬼と釈せる。是

小や。天狗と云ふ也。日本人の云ひ習はしあり。佛法者の中。破戒無慚の者。多く此報を受く。我相憍慢名利諂媚等此業を。佛寺に交ふるは。定めて此道小入法しと云ひ。

埃囊抄。天狗と云ふを。聖經の中に見及むべし。砂石集。云ふれど。古徳の釈。天狗者。天光明義自在義。則表佛果。狗。痴闇義不自在義。示生界。則是生佛不二名也。又。天。天曼荼羅。是金剛界。狗。地曼荼羅。則胎藏界也。殊小聖教中。天狗と云ふ。魔王所部の從類あり。妙善王。金著女也云々。天狗首也。也。見えしと云ふ。却て覺東あり。延命地藏經といふ物。天狗土公大歳神と云ふ事あり。此を正しく俗小

云ふ天狗を云へるあれど。此經を此方にて偽作せるあり。證とは成らば。或人正法念處經觀天品。有大光明遍虛空中。如火炎熾。如大天狗。從天而墮。云々。彼天狗量五千由旬。一切虛空皆悉炎然とあるを。世にいふ天狗の本文ありといふも。此を天上の光物此事。初引く史等。天狗を云へるは。非れ也。是ま謂ゆる天狗は證とは成らば。谷響集。此邦天狗從我教見之魔類也。此邦何謂無魔哉。凡出家人無菩提心。我執憍慢。專求名利。經名魔業。如是之曹當作天狗也と云ふ也。

聖賊集ふも。圭峯於盂蘭盆經疏。曰。畜豎行曰鬼と釈
り。日本の天狗も。山伏の如く。小て豎行するなり。是鬼の
形ありと云へり。此も無住法師が書あり。

此は魔業といふ事は。華嚴經離世間品。忘失菩提心。修諸善
根。是為魔業。於甚深法。心生慳恡。有堪化者。而不為說。若得賤利
恭敬供養。雖非法器。而強為說。是為魔業。樂學世論。巧述文詞。開
闡二乘。隱覆深法。是為魔業。增長我慢。無有恭敬。其心弊惡。難可
開悟。是為魔業とあり。

空華老人の名義考も。此文の半をひきて。眞實の道念无
して。或も我慢勝佗にせめ。或も名聞利養に為る。善根を修

する者多し。正しく魔道不入の正因あり。此經文信コト子天
狗道の證文あり。と云へるは實然ゲニサるなり。

はく大虚空藏所問經。不護菩提心。是為魔業。於諸有情。簡別
行施。是為魔業。樂求生處。而持禁戒。是為魔業。為求色相。而修忍
辱。是為魔業。作世間事。相應精進。是為魔業。於禪味著。是為魔業。
以慧厭離於下劣法。是為魔業。在於生死。而有疲倦。是為魔業。作
諸善根。不迴向。是為魔業。厭離煩惱。是為魔業。覆藏已過。是為魔
業。背恩不報。是為魔業。不求諸度。是為魔業。慳惜於法。是為魔業。
希利說法。是為魔業。離於方便。成就有情。是為魔業。毀破禁戒。是
為魔業。順聲聞行。是為魔業。順緣覺乘。是為魔業。要求無為。是為

魔業厭離有為是為魔業。心懷疑惑不利有情是為魔業。好疑不通達是為魔業。好懷詭詐假示哀愍是為魔業。廣橫惡罵是為魔業。於罪不厭是為魔業。染著自法是為魔業。少聞便足是為魔業。不淨心口是為魔業とも見ゆ。

但し古も甚く文を省きて引たり。委くは本書を見及し。はく釋氏要覽。魔逆經ある魔事といふ事を釈子。瑜珈論を引て。魔事者於利養恭敬稱譽。心樂赴入。或放逸慳吝廣大希欲。不知喜足。忿恨惱覆矯詐等。皆是魔事と云へり。また大般若經。魔事品あり。楞嚴經。五十種魔事を説り。色受想行識。各十種ある由あり。披き見るべし。

此等此文を見通して。古の名僧此中。戒行を持て。名利の爲。善根修せし倫を稽ふる。また古く世に聞えある。道昭和尙ある。此法師此事を。文武天皇紀四年三月己未。日の下。道昭和尙物化。天皇甚惜之。遣使吊賻之。和尙河内國丹比郡人也。俗姓船連父惠釋少錦下。

船連を。姓氏錄右京諸蕃下。船連菅野朝臣同祖。阿太郎三世孫。智仁君之後也。又云。菅野朝臣出自百濟國。孝慕玉二世孫。貴首王也と有りて。百濟人の末裔あり。惠釈を皇極天皇の御世。蘇我臣蝦夷が誅せらる時。國史を悉焼る。と爲し。炭火中より取出る人あり。少錦下を。孝徳天皇の

御世小定られし位あり。

和尚戒行不缺尤尚忍行嘗弟子欲究其性竊穿便器漏汚被褥和尚乃微笑曰放蕩小子汚人之床竟無復一言焉。

史にはかく戒行不缺と有れ也其靈の語一一生の中小戒行相應せむ破戒の罪重しと云られむ缺し戒行も甚多

加正しと見也。

初孝徳天皇白雉四年隨使入唐適遇玄奘三藏師受業焉。

今昔物語集小も此僧の事を記して智廣く心直し道心盛

小して佛の如くあり然れむ世人公よ正始免上下の道俗

此男女首を傾りて貴ひ敬へること限無し而る間天皇道昭

出を召て仰給オホセタマをく。近來チカゴロキ聞キは震旦小玄奘法師と云人有りて。

天竺小渡テ正教を傳へて返來カキキタると其中ナカ大乘唯識とい

ふ法門有りと其教法いまマ此朝チカみれし汝彼國へ罷渡り

て彼教法を受て返るカと道昭宣旨を奉ウケマシて震旦小渡

とぬと有ア但レ其傳の中小唐土チカ逗留の内小新羅國チカ

斷渡り役小角小相見せる由を記せキ座マ誤アヤありそは佛仙の

又マところ小角が傳の中小辨へシるを見るミと

三藏特愛令往セ同房謂曰吾昔往西域チカ在路飢乏無シ杖可ク乞ケ忽有

一沙門手持テ梨與テ吾食之吾自啖後氣力日健今汝是持梨沙門

也。

是本朝子禪といふ佛法を行ひし始あり。委くは印度藏志
小云予りき。まゝ宇治橋城造れる。後世までのよた功あり
了。然れど其は名聞利養の心うて為る。魔道小落る
因縁ありしと通えり。

和尚周遊凡十有餘歳有勅請還住禪院坐坐禪如故或三日
一起或七日起一起儵忽香氣從房出弟子驚怪就而謁和尚端坐
繩床无有氣息時七十有二弟子等奉遺教火葬於栗栗一本原
天下火葬從此而始也世傳云火葬畢親族與弟子相爭欲取和
尚骨斂之飄風忽起吹颺灰骨終不知其處時人異焉と有り。
今昔物語集よ。道昭が唐土の玄奘法師が許小居りし時。

玄奘が弟子其宿房を竊小伺予は道昭が口より光を放ち
と云ひ死期も兩牙よ光を放ち。壁を透りて庭
松を照し良久して其光西を指て去ま由見は靈異
記ある常昭が事を錯り傳へる物あり。元亨釈書小。や
がて其錯を受て記せれ。云小足らば常昭が事は屍解仙
の処小云予り釈魔の態としてかゝる異を示るること常
あり。怪むべき小非也。又釈書小。弟子思其兩牙放光欲收之
而先為鬼神取去。闇毘之後欲取其骨暴風忽來骨灰共失と
有るは國史の文小依て撰者此例の妄説を加ふるあり。
國史如此を見えと雖ども此僧案小破戒の事ども有り

て魔道マダウ小落オチり。然サるは明慧上人傳といふ物也。或時上人云く。去イニシころ笠置カサギ此解脫上人來臨して語りらく。

解脫上人とは。釈シヤク負慶をいふ。少納言入道信西の子あり。建曆三年二月三日。五十九歳ハチジュウニにて寂せり。此コノ古事談コトワタシの辨ハジメ入道貞憲サダノノが子と云イハふ。明慧上人とは。釈シヤク高辨をいふ。

秋アキ此明アカ小晴ハレなる夜ヨ。人數アタタ來る音ナゲして。草菴クサウマの窓マドを叩たたき。謁ケツせむ事を望ノゾむ。扉ヒラを開ヒラきて出向イデふ。異類イニシ異形イニシ此者コノモノども其數あり。とき。其中ナカは然サレべき仁ニトと覺オボしくて。雪ユキの頭霜カシラの眉マユある老僧ラウソウ。香カウ塗ニの衣イを著キて。面貌オモテ事コトから此世コノヨの人ヒトとも覺オボえぬ体サマゆて。進寄スミヨリて語カ云イハく。定サ免シて聞及キコ給タマらむ。我ワレを往時イニシトキ何某ナニガシと云イハし者モノあり。

按アぶる小文勢フミサマを見ミゆス。此時コノトキ老僧ラウソウその名告ナせし事コト疑ウタれし。然シカれども此傳コノツト字記ジキせる人の。此コノ傍カタク痛イタき事コトあれむ。憚ハバりて態フサと名ナをは著シらシゆスあり。其コノは同じ佛道ブツダウの人ヒト形カタまはあり。さはまは佗ホカよりて何ナニう憚ハバらむ。誰タレあらむと考カウふはたしきれりて。佛法ブツポフ小於オキて。隨ツ分ブ小行コウ學ガク年積トシツクりて。深理シンリを究キウるは由ユを存ゾじき。然シカれむ其頃コノトキ天下カタクは肩カタクを並ナラぶは輩トモ無ナりき。皆みな是世コノヨの知チ所トコロれりて。然シカれ小唯タカ此コノ大乘オホマウの本源ホンゲンを究キウめむ事コトを先マととて。強オホく戒ケイを專マウととる事コト無ナりた。仍ヨリて破戒ハカケイの事コト耳ミミありた。其故コノユは大乘オホマウの本源ホンゲンを究キウめられども。一生イツシヨウ此中コノナカ小戒行コノケイコウ相應オウオウせし。破戒ハカケイの罪ツミは方重カタモ小依オモりて。魔道マダウ小入オチりた。古コノよりて天竺テンシク震シ且ナ本朝ホンテウ小名ナを得エるは

貴僧高僧トモ。此戒力死人。一劫二劫。まゝ三四劫も。此魔道
小落タる類タあげて計カけうらま。此魔道の習ヒ。一度落テて。急
子免メれ出ダ事難カし。我レも二劫小此業を果ハすべきあり。入滅の
後五百餘年小及べば。久シた心地し給ムらむ。

按ズ依ル解脫房ヲ。順徳院。天皇乃建曆三年ニ。建保と改元
有リし二月寂セまば。此老僧の靈ハ來リし。其レよシ後ハう
了リ前サありらむ。姑ク解脫房ヲ寂セる年ニ事トして。靈ハ此語
小依テて。五百餘年を操リ上リて。その頃小大乘の經旨を極メ
て。其世ノ肩ヲを竝ブる者ハく用ヒられ。加テ長命トせし僧ト。
誰シあらむと考ヘる。道昭法師ハぞ有リる。其レを上リ小舉メる

文武天皇紀ニ。四年二月小。此僧の物化セる由ヲ記ス。其年小
了リ建曆三年まで。其間五百十四年あり。

然れども其五六百年を。万億重カ孫トても。猶ホ其一劫小も及ラず
らズ。況イや二劫を過スべき末ニ思フる。味ア氣キあき事レ也。我レも大
乗の義を明キし小依テて。此業を償ツハ果ハてば。佛果を證シへけ
まシど。多劫の間徒ラる。苦患ノのみ沈ミて過ス行ト。偏ヒ戒律の
闕ケる故アリ。今見ル依ル末世ニあれども。道を修メる志深切ナ
る類タあり。此を人間ニ普ク示シ知ラしめ度ト。此菴室ハ列シ參セ
了リ。後學小傳ヘ誡メ給ムらむ。

今按ズ憐ミむル。道昭此道小落テても。れハ未ダ其道ヲグテ佛

祖の假説有しよ。出來しる道は依事ヲ悟ら。佛果とて
異小證にべき道の有て。多劫を經て。其道小至ら。依く事
此如く思ふるは。早く先輩此其道小入りて在る。其の誑
惑はるを。實と思ふ依也。佛法の極意を。即心即佛即身
即淨土。即て。説得べき道も。行ふき淨土も有。おとれきを有
と示さる淨土は。其もや。て佛祖此假説有しよ。姑く妖
魔の変現は。當淨土。て。彼も此も神の道よ。云と。死を。魔
道を免れ。然れど其を因縁小引きしる。迷惑心小こそ有
れ。我が苦道小落しるを前鑑と為しめ。後人ヲ戒を持しめ
て。我の落しる惡道小も落さじや。かく態と列參して心を

添しる志を。發露懺悔の意も叶ひて。殊勝あり。了。
とて此は某彼を何某と云を聞く。古み。名を得しめし僧
侶等あり。今ハ既。佛果小至らむと思ひし人等也。如何し
て斯を成ぬらむと。不思議。覺えて。偕如何る御苦。候と
問じ。うは。或を諸の異類。此者來て。身の肉を食ひ。命を奪ふ。
其苦小堪ばして。絶入て。暫く有り。生れ。ま。異類現じて。
頭目髓腦手足を截取する時。も何れ。或を猛火現じて。全身を燒
く時。もあ。是。其れを。ち殺盜淫の果。あ。或は黑白の二鬼現
じて。鐵箸を以て。舌を抜き。或を熱鐵を吞しめて。遍身焦れて
炭の如。ある時。も何れ。是。妄語飲酒。非時食。此果あり。此の如。死

苦み。一日小三度五度。人シカに隨シひ時ト小依りて。様カく小換カ依あり
と云ひて。搔カキ消クやう小失ウセと云とぞ。

是までは解脫房が夢ユメ。道昭の靈と對問せる有趣アリサなり。以
て下を解脫房が云フ言ハを。明慧房が弟子小語れる趣あり。
其三熱クシれ苦クシの事ト。下小別コト論ロふを見よ。

此事を思ふコト。是實語あり。尤慎トモツむべき事あり。今は諸宗を學
ぶる者有れども。戒を知れる輩トモハあし。況や受持ウケする類タガや。
今を姪酒を犯トらるル法師も希コト小。五辛非時食を斷タと依僧も
れし。是カの如カき不當不善フシ舉動コトをもて。法理字究ツと云とも。魔
道小入トあは。多劫の間苦を免トれズ。如何してル戒門を興行ス

法フき方便を廻マさシむと云れしト。大オ紀キ小其謂イ有りト。明慧房が
語れる由見えト云とぞ。

文フといふく約ツめて舉トげシば。委ツくハ本書シ就ツて見るル法フし。
明慧房と解脫房が事は。あハ別コト小考コトあり。下小云を見よ。

此來れる靈の語フ。入滅の後五百餘年と云フる年數ト。まハ其
頃天下小肩カを並ナぶる輩ト无クりきと云へ依語ト。まハ大乘を學ブこ
りト云へ依語ト。まハ雪ユキれ頭霜の眉ある老僧ト。香カ深シの衣カ著シふ
了ハ也ト有リあハとハ成ツ合セ考フるコト。道昭法師トれらで誰タり有ラむ。
禪チを楞伽經をもて第一トとシ。是ハ大乘といふ經トハ中ナ小も。
最ト小る物あり。物化の歳ト。七十二歳あるト云フ上カり舉トるコト

傳小見えぬ。

此僧の父を。船史惠釋とて。國史に大功有りし人なり。其子とて。過りて。釈子と成。かゝる。流苦を受る事は。いと。憐むべき事あり。然れど。釈魔の曲れる心。依持とて。後學小心を添ふるを。今昔物語ある。此僧は傳小。心直しと有。流符ひて。殊勝なる事なり。

まゝ。按ふ。砂石集小。伊勢國の或山寺小。如法經行ひ。僧の弟子は。兒。佗地ともれく。失せて見ざ。ける。一兩日。過て堂の上。みて見付。する小。正念も。ぬく見。り流。暫して。本心。成ぬ。さ。語。り流。を。山。臥。共。誘。ま。て。時。の。間。小。筑。紫。

の安樂寺といふ處の。山中へ行ぬ。老僧の八十餘ある。世は貴氣。小。て。其中に尊者と見。しが。何れ兒。と。來よとて。傍小。置。て。あ。奴。原。を。所。詮。ふ。き。者。を。此。小。居。て。物。見。よ。と。云。ふ。頼。しく。覺。えて。見。る。程。小。山。臥。ども。舞。躍。り。り。る。小。網。此。様。ある。物。空。より。下。り。て。引。廻。き。様。小。見。ある。時。小。山。臥。ども。興。覺。て。北。む。と。ほ。る。小。叶。を。交。網。の。目。より。火。然。出。て。次。第。小。然。上。て。山。臥。ども。皆。焼。て。炭。灰。小。ち。ぬ。暫。あ。り。て。又。本。の。如。く。山。臥。り。成。り。て。遊。び。り。流。老。僧。あ。れ。山。臥。是。へ。參。ま。と。呼。て。い。り。小。和。山。臥。よ。あ。の。兒。を。具。して。來。し。を。疾。く。本。れ。山。寺。子。具。して。行。り。と。云。きは。恐。る。氣。色。小。て。具。して。歸。ると。覺。於。

ると云りてと有也。此老僧れ殊勝に聞ゆるは若くは是も
道昭ふは非ざりしう。然らばも安樂寺を開基せぬ法師
有りらる。

儲まゝ名聞利養の爲小。矯詐の説を構へ。我慢して。廣大の
希欲を發せるは。行基和尚を最速りてりぬ。
其を四十九處に寺を建するは。忘失菩提心。修諸善根。而
魔業あり。大僧正の位を受け。四百人の出家を賜れるは。於
利養恭敬稱譽。心樂赴入。よて魔事あり。邪淫戒犯して。孽子
を生給へる。光明皇后小菩薩式を授けたるは。得財利恭敬
供養。雖非法器。而強爲説。て魔業あり。殊小具足戒を受

る身もて。畏くも伊勢大御神の託宣を偽作して神を誣ひ。
皇を誑惑せる大妄語を吐て。國家に道の大義を乱せり。尚
勝て計ぐく。魔事魔業を多かる也。其は巫學談弊小記せ
るを見るに。

後小出ぬ最澄法師も。此小效いて廣大に希欲小。比叡山を
物し。大伽藍を申し行ひ立て。天皇祖神の古傳を乱す。大妄説
を作して。彼山の本縁と成し。宇佐八幡宮。賀春神。諏訪神など
此妄説を作して。是魔業あり。

其を八幡宮。法華に法味を好給ふと託宣を偽り。賀春神を
半身石の如き梵僧あるが。此も法味好むると云ひ。諏訪

神小も然る妄説を作れり。此事も委くを巫學談弊子云。正。は。此僧の魔道小落しり。と覺ゆる事は。神社考小。慶長甲寅夏。叡山僧侶到駿府告衆曰。頃叡山有奇事。覺林房奴二郎者。一日忽失經數日。歸。人問何之。奴曰。有人將我去。到伯州大山。已而登筑紫彦山。於是大山彦山之山伏相共歸。時人々自愛宕鞍馬比良來會。有一僧自上野國來。座定鞍馬僧正曰。久無奇怪。東州西州合戰。今其不遠。愛宕太郎曰。如何。叡山次郎曰。東方必勝。其勢既見。言已各歸本山。我今見之。諸人不信。幙下聞而奇之。後果有大坂之軍。自古民之訛言時之童謠。史之所載。今亦奇哉。云。れ。云。此叡山次郎と云ふ者を疑ふ。最澄法師の釈魔と為

き。依よ。正の稱ありと聞え。云。正。或人れ説。次郎坊云。云。は。舊く叡山小住める天狗よ。て。最澄法師の靈小は非交と云。を信られ。交。抑皇國。固あり。有る枉神と。僧徒の化れる釈魔とを考ふる。小。同類の物。を有れ。也。其所業は別。依事あり。此。次郎坊太郎坊が如き。其事跡を思ふ。小。釈魔。形る事疑ひあり。猶云は。此法師等。より以前。小。其名の聞え。依。を以ても知。し。猶。近く思ひ合。依。事は。櫻町。天皇の元文五年。小。比叡山の西塔。釈迦堂御修理有る。小。奉行を江州信樂。形る御代官。多羅尾四郎左衛門といふ人。也。大津ある御代官。石原清左衛門

といふ人勤ツトメられりる。石原ぬしの家頼小。木内兵左衛門とて。三十餘歳の人有しが。三月七日に申時。ふと行方知れず成しうば。方くを尋ぬ。彼者の履ハキと依下駄。行榮院といふ寺の玄関前と。内庭とよ片足踏オキ落てあり。奇みアヤシたゞ見る。庭に角スミある辨天の祠ミヤに處り。脇指鞘サヤを碎ツグりて。身は鎧ヤウ鈎コウの如く曲カり。脇指ツツヒ添ツヒりる小刀は。三ツツ折てあり。ほと其辺小下帯も三ツツりきれて有けむ。人々天狗の業ノチと心得て。たゞ加しこ尋ぬる。兔角見えざ。依故ヨコ山内ヤマノウチに寺テくおても。祈イリを始めて。慈悲大師廟を始め。魔所といふ所マく。城人を分て尋り依り。慈悲僧正の名。良源や云ふ。世よ元三大師と稱ナりる。是あ

了。其廟を叡山の内。横川ヨガハと云ふ處トコロに在て。其處ココも今も大魔所と云ふやぞ。猶お此僧の事は。次卷の始シに載シせり。其夜丑刻前と覺オぼし。此頃イツク小。何處ともなく。大風の吹おとく大音オト小。頼タノまう頼タノまうと呼聲ヨブコエきあや。折しも大雨なる。山をれや雪深く。物の何やも見ミこぬ。鈴木七郎と云ふ人。彼聲を尋ミねて。釈迦堂に庭ニへ出て見る。小堂の箱棟ハコムネ小羽ハ形ガタあり。異形イカタのもに立居て。恐オソろしや下シして給タれといふ。七郎言葉コトバ城シにかけて。兵左衛門あてはあきやと問トふ。然カ也ナリや云ふ。能ノく見ミる。小翅コテと見えしを。破傘ヤブカサ披ヒぎかけらる。あはかくて人々よ。集ツり。四郎兵衛といふ働カタの者。棟ムネより上りて。迎ムカひ小來れ。と云

牙は。兵左衛門忽タキニキ小無性コムシヤウ小れ也。持モチする傘カサを捨スツつて。爰コト小四郎
兵衛也。兵左衛門を背セねひ。帯オビおろして。腹ハラをひ小形コガタめて下
りる。三日ミツヒのて本性ホンシヤウをふき依ヨ後ノチに問ト牙は。七時ナナトキを覺オボし死
比ヒ。何處ナニトコロとも形カタく名ナを呼ヨビりる也。外ウチ小出シる。玄関ゲンカンの前マエに。小
法師コホウシ一人ヒト黒衣クロキ小短コミカきく。袴ハカマを著キして。兵左衛門とふ。彼
處ココ小至シれ也。又一人ヒト顔カホ赤アカくて黒髮クロカミ戎ミヤ乱ミヤし。引ヒキち依ヨぐ。又マタ見
えて。裝束ソウソク戎ミヤ著キし居イて。玄関ゲンカンの屋根ヤネネへ上ノボる。云イハへ云イハへる故ユ。
主人ヌシある身ミあれレを行ユキか。しと。脇指ワキサシ小手コテを懸カケむとせし。小。彼
異人イニヒト也。も奪ウバひとて。投付ナゲツキする其時キトキ。鞘碎サヤクダけ。身ミを鐺鈎ナベヅルのお
とくれまて。

今思ふ。兵左衛門がいひ分カタ甚理イトコトある戎ミヤ。天狗テンクの所為シヨウい
く不當フタヘあり。然シカるは挂カケまくも畏カレれ天皇テンノウ小代コトて奉ホウらして。天
此下ココノの政テイ治チをし給タマふ。征夷大將軍テイイダイサウジれ台命ダイメイを蒙カシりて。此普請ココノフシヤウ
の奉行ホウヤウする人ヒト小。其事コトめて仕ツカふ依ヨ人ヒトを。即公武ソクキウブ乃御用ノミヨウを勤ツト
むる人ヒト。其帯オビはる兩刀ニタガ。やがて其士キシの面目オモテする物モノれま
は。人ヒトく私シ此物ココノモノは非ヒ也。然シカるを天狗テンク慢マンて小。そ此ココ魅術ヘケテウを以ヨリ
て。斯依ココノ無道ムダウのわざを為スせ。凡スベ多世タセ此帶刀ココノオビタガを依ヨ徒ト。その
帶刀オビタガを所以ユエニ此本ココノホンを思オモひて。身ミの飾カザリ或ナラバ人ヒト恐オソしれど此
如コトく心得ココロエするが多加タカ也。能スベく其帶刀オビタガはる所以ユエニを知チて帶
せむ。天狗界テンクノカイと云イハへ也。是ココも天狗テンクれ志シらる國內クニノチの幽界ユウカイ

あまは。天狗らいうで然る不當を働くは。兵左衛門實體
者と云へ。此旨を知らむ故。天狗のちる無道
逢ふりむかし

下帯を取捨よと云ふ。此を免し給へと云ふ。是非小捨はし
せいふ。此戎をれむ。彼異人は杖小かく。依を見えしが。忽
三よ切れと云。然して玄関は屋根へ引上て。此方の申分を背
く由云て。杖ふて散く小打擲し。依時。長一丈計めと覺し
此高僧の。紅衣戎著し。ふるが來ふ。叱やぶ。免て。何やらむ密語
くや見えし。其時を三四間も隔て見えける。六人ばかり有
しと覺也。かくて異人。我と伴ひ行ふしと云ふ。背きては

悪うとあむを思ひ。差圖小從ひけれむ。是も乗べしとて。丸き
盆のおとき物を出せ。是も乗り。是は。彼小法師。兵左衛門が
肩小両手をかけ。下へ押し付けられしと覺えり。其後地を
離れ。虚空へ高く上り。依。

此の謂ゆる高僧を。即延曆寺に開山。傳教大師最澄と聞え
る。其由を下に評論小云ふを見て知るべし。まゝ丸盆の
如き物小乗せて。伴ひと云と云。此を叡山天狗也。凡人
を乗躋せしむる術と聞えり。神仙小種々の乗躋術ある
小準へて思ふは。叡山天狗小。かく依乗躋術阿らむ。此も。
疑ふは。非也。

然らば秋葉山へ行^{コト}きし。虚空を飛行し。行方も知らず。海の上を通^トりりる。餘^トも恐^{オソ}ろしく思ふ所^ト。彼高僧出て水不能漂と云へむ。恐^{オソ}るるらと示せる故^ト。眼^メを塞^{フサ}死^シを通りりしと。海も其^ト終^ト見えしと。さて秋葉山と覺^{オボ}えて。山上小至^コ見^ミる。小十丈計り深^{フカ}き谷底^{タニソコ}。火炎上^ノる。異人云^ヒるは。汝此谷へ飛^トしと有^アりとも。此火炎の内^ノに落^オちむ。焼^ヤ死^シべしと恐^{オソ}惑^{マド}ふ折^マしも。高僧出て。火不能焼と云へむ。恐^{オソ}るるらと示^シせり。眼^メをふさ^フぎ飛^トりれむ。五六疊計りの平^{ヒラ}な^カ。岩の上小立^{コト}止^トりぬ。此文小據^コりて攷^カふる。水不能漂。火不能焼とも。法華經の文^ノりて。傳教の始めて立^タしむ。天台宗旨^ノに要語^ノあれむ。加

く教^{コウ}子^シと^ト聞^キえ^ル。儲^サ加^カくの如^ノく。人^ノは恐^{オソ}るべき事^トを。強^{シヨク}て爲^ナしめて。人^ノの心^ヲを引^ヒ見^ミる^ト。と。神仙も亦^モ依^ヨ事^ニある^ト。其^レは深^シき由^ヨある事^ト。天狗を殊^シる^ト。或^レは自^レ樂^{ラク}みと爲^スしむ事^ト。その例^トいと多^タう^ト。

彼^レ異^イ人^ニを此^ノ所^ニおて暫^{シラ}休^{ヤス}み。ま^ま妙^{ミョウ}義^ギ山^ノ。彦^{ヒコ}山^ノ。鹿^カ嶋^{シマ}あどへ行^イふ。其^レ外^ノ何^ニ國^クともれ^ず。諸^{シヨ}方^ノ見^ミ物^ヲ致^シせしあり。此^ノ時^ニ兵^{ヘイ}左^サ衛^{エイ}門^ノ思^シふやう^トは。既^シに十日餘^ト經^ケぬらむと思^フひ。何^ニ卒^{ソツ}暇^{アタ}給^{タマ}れ^ルしと云^フ。兵^{ヘイ}左^サ衛^{エイ}門^ノが天^{テン}狗^コ小^コ誘^{サツ}ちれ^ルる間^ノを。一日^ニ一^ト夜^ノ終^マり。大^オう^ト幽^ウ界^ノ小^コ伴^トちれ^ルる。多^タくの日^ノ數^ヲをも。志^シは^しの間^ノありと思^フふ事^ト終^マる^ト。十日餘^トを經^ケしむと思^フへる^ト。甚^シいふ^トう^トし死^シ事^ト

あり。仍て思ふ。神仙の幽界入りあるは。久し。死年月茂も
短しとし。妖魅此界子伴をれ。一時の間をも。長しと
思へる。あや。此を猶考ふ。後し。

時。白髪の老人。出来り。然らば。金銀を出さ。後し。と。大判。小
判。一歩。小間銀。山も。小臺。載せ。此。金銀。何程。遣ひても。絶る
事とは。無き由。あて。給る時。貴僧の云。るは。其金を。受取ら
ば。其方。二人。此。伯母の命。一年。終。縮るべし。と云ふ。兵左衛門
申さ。ハ。有。ぐ。と。く。は。候へ。とも。伯母。此。命。縮。ま。依。事。歎。は。し。け
きは。断。て。申。度。と。ぞ。云。る。此。白。髪。の。老。人。も。貴。僧。の。眷。属。を。依。事。は。云。ふ。も。更。ぬ。て。は。さ。さ

人間にて用ふる金銀を。大く。用ひ。ぎ。依。事。と。聞。ゆる。小。此
天狗界。は。其。定。ち。た。あ。や。斯。を。う。て。多。く。此。金。銀。を。與。へ。む
と云。し。と。是。ま。く。不。審。し。た。事。あり。り。ゆ。

異人又云々。依。を。其。方。奇。特。ある。者。なり。然。ら。ば。一。生。安。穩。小。暮
以。様。なる。秘。密。の。薬。法。行。法。を。傳。授。さ。後。し。其。薬。種。の。内。一。味。を。
當。山。よ。て。外。小。れ。し。調。合。の。節。登。山。致。さ。ば。必。是。を。授。く。べ。し。と
て。薬。法。書。付。給。を。受。ける。此。事。必。人。小。知。ら。ぬ。ら。ん。先。三。年
此。内。を。身。心。清。淨。小。して。別。て。女。の。不。淨。を。堅。く。慎。み。行。法。を。懈
怠。有。へ。あ。ら。ぬ。三。年。過。て。後。小。妻。此。語。ら。ひ。有。る。は。苦。う。ら。ま。然
し。薬。調。合。の。節。を。行。法。堅。く。守。る。後。し。汝。正。直。を。依。故。小。是。を。傳

ふと示されり。偕其方をかく誠むる事は。摠ての人とも心
悪しく。山を麓末小致し。何しや心入の諸人子見せ去免此為
あり。歸る後小。此趣を諸人子傳ふ。最をや歸し申は。及し
とて。丑の刻むり。と覺し。此比。高山此峯小。ねろさ。如く
覺し。本堂此棟あり。其後ハ彼異人あり。此行方あら。此
時小先此貴僧大音。て呼むる聲。山河を。くは。り。と小覺
えり。其時兵左衛門。かく吾を。に。救はせ給ふ御僧を。何
人あり。渡らせ給ふやと尋し。は。我を此山。九百年來住を
や。云。せ。夫より働の四郎兵衛と云者來て。某を捕へし
と覺ゆ。彼貴僧も行方知ら。吾も夢中。成ぬと。語

り。と其時の事ども。親しく見聞し者の記し。此巖山天
狗之沙汰。ち。書小見え。此を近頃。事れ。い。を正し
き筆記と所思。故に引出。上

上、件の事ども。熟致する。彼の夕ノマウ。と。呼ぶは。
兵左衛門。小は。非。謂。貴僧。呼ぶ聲。依。明。
了。偕我。此山。九百年來住。と云。依。由。る。小。依。
此を疑。く。傳教。あり。とは。知ら。れ。然。る。最。澄法師の
寂せるは。嵯峨天皇。此弘仁十三年。元文五年。小至り。九
百十九年。あれ。其年。數い。能く。符へ。其は。佛法。出世間
の說。極樂。往生の說。とも。小。其道。此。妄誕。其道。首張せ

る。謂ゆる高僧祖師も。出世間を更なり。往生はと云ふ。極樂世界の説も妄なる故なり。死しての往方は。即此世間の幽界にて。佛祖さへふ。其靈の行方は。常在靈鷲山あり。泥てその末派此僧徒を。其在世中小。甚く執せる山。小常在して。天狗と成りて在る事較著し。然れを傳教の窟山。常在在る事。云ふも更なり。儲是より三年を死て。兵左衛門其行を乱し。茶屋女と志のく。此事ありて。非業此死を遂とめと云む。謂ゆる心中や云はうれき死を為とめと聞ゆ。哀を兵左衛門は。天狗小ける妙法の傳を受ざらほし。ば元よその貧浪士にて。其直情正行を。世のかぎに遂げ小

むを。中く小妙法の傳を受て。欲する俸。黄金を得む故。其行を乱して。然る非業の死を。遂ぐるあり。抑始免兵左衛門哉。天狗此誘ひ出せる事。元來兵左衛門。過失ある故。是非。餘人らが不當此行に在る哉。諫めざるが憎しとて。誘ひ出して打擲せ。不當此を更小も云は矣。彼高僧の叱り小。其過ちを悔する趣。後小兵左衛門が心を慰めむとよや。伴ひて。諸國の名山とも見せめ。れ依。猶氣れ毒りや思ひらむ。呪文をも教へ。まゝ用ふる時。伯母の命を縮むべき。金銀を與ふむとし。其をも辞めむ。終りは身哉非業小亡なり。基縁とある藥法。與へて。盛

壯の男子。不淫戒を三年禁じ。それを禁じ敢て。然る
非業。小死しめしめは。何小天狗の枉ら。形ら。や。れ。不此
事委くは。本書小就て見る。信し。○ま。沙石集を見む。洛
陽。或女。靈病。何。種。小祈。れ。ども。有驗の者を
も欺き。笑け。む。力。及。ば。で。打捨。り。ゆ。彼。云。く。佛法は。眞實
の道心。何。て。ある。生死を離れ。悟を開く事。ある。何小學し
行。れ。ども。名利執著の心。何。ゆ。て。實の菩提心。形。れ。ば。魔
道を出。我。一。代。此。聖教。も。不審。あ。く。知。れ。然。る。小道
心。れ。く。志。て。今。小。出。離。せ。交。僅。小。紙。一。重。隔。り。て。覺。也。依。あ。て。
我。天台山の。立。始。し。時の者。あ。て。と。語る。さて。當世の智

者と聞ゆる人の事を問へむ。皆云。甲斐。あ。く。云。へ。て。有。り。
是も彼。最澄法師。此。靈と聞え。と。て。然。る。心。外。國。外。天。皇。の
次。小。空海僧都。あ。れ。も。行基。最澄。が。妄説。小。效。ひ。廣太の希欲。小
高野山を竊して。其山の神を誣。と。る。妄語。せ。依。が。魔事。ある。小。
樂學。世論。巧。述。文。詞。て。諸佛。を。讚。ま。依。摩訶毘盧舍那。とい。佛
語。小。天竺。を。更。あり。漢籍。小。も。曾。て。見。え。ざる。大日佛。を。云。ふ。佛
名。を。偽。作。し。翻。て。摩訶毘盧遮那經。を。大日經。と。譯。し。其。本。緣。小。
畏。く。も。天照大御神。を。己。が。偽。名。の。大日佛。を。人の思。ひ。紛。ふ。依。
き。幻説。を。巧。み。出。し。

此事も巫學談弊と。印度藏志と。小委く論へて。中。小。も。嵯峨

天皇の書せ給へる。金字心經の奥に書くる記に。詣神舎輩
奉誦此秘鍵。昔予陪鷲峰說法之筵。親聞此深文。豈不達其儀
男と書るれども。餘亦依妄語あり。入日抄の思心録に引
殊小名聞利養の爲に。魔事妄言は更にも言はま。我慢勝他の
惡念深く。修圓法師を呪殺し。曾て見よ。大日抄の云ふ
今昔物語集に。嵯峨天皇の御代に。弘法大師僧都に位ありて。
天皇の護持僧ありき。はら山階寺の修圓僧都といふ人も。
護持僧ありて。共は候ひけり。此二人は僧都共り。止事あり人
りて。天皇分は思召に事無りり。然るに修圓僧都。天皇の
御前候ふ間。大なる生粟あり。天皇此を煮しめて。持參れ

と仰せ給へば。人取て行くを見て。僧都云く。人間は火をも
て煮じとも。法力をもて煮候ひあむと云ふ。天皇聞給ひて。
極め貴た事あり。速に煮じしめて。塗する物の蓋に粟を
入せて。僧都の前にお置け。僧都然まは。試み煮候はむとて。加
持けるに。甚吉く煮られあり。天皇此を御覽じて。限れく貴
ひて。即ち聞召はる。其味は他にお異れり。かく爲るを度くお
成ぬ。其後大師參りあり。天皇此事を語らせ給へむ。大師
聞て申し給ふ。此事實に貴し。而るに己候む時。彼を
煮しめ給ふべし。隠れて試候むと隠れ居ぬ。あつて僧都
を召て。例の如く。粟を煮しめ給ふは。僧都前にお置て。加持を

依レ子此度は煮レられま。僧都力を出シて返ルく加持スいと云へ
ども。前の如く煮レられま。事ハし。其時小僧都奇異ニ思ヒを成
ちて。此ニ何カある事ヲと思フ程ヲ。大師喬ノより出ス。僧都
此ヲ見て。内ニまむ此人の押サける也と知リて。嫉妬ノの心忽チ小
發ラめて立タぬ。其後は二人此僧都極キめて中惡ク成テ。互ニ死
綿クくと呪咀シり。其時小大師謀ヲ成テ。弟子ども城市
小遣ヤりて。葬送ノ物ハ具共を買カし。空海僧都ニ。早ク失セ給
了レむ。葬送ハ具ヲ買カふありと。教ヘて云ハしむ。修圓僧都の
弟子是を聞テ。喜ビて走リ行キて。師の僧都ハ此由を告ツ。僧
都此字聞テ。慥ク聞キ。於テやと問フ。弟子慥ク承リて告シ申ス。

ありと答フ。僧都ハこれ他ニ非ズ。我ハ呪咀シ於ル祈ノの叶メぬ
依也と思ヒて。其祈ノの法を結願シ。於テ其時ハ大師人をもて。
竊ヒ小修圓僧都ハ此許ト。其祈ノの法ハ此結願シ於テやと問フ。むる
。今朝結願シぬる由ハ依ハいふ。其時大師切テ小切りて。其祈ハ
此法を行ハり。修圓僧都ハ俄ニ失セり。大師其後ハ心
安クあむ思ハま。依ハと有リ。此事古書トモ彼此ヲ見え
る。何モ守敏僧都ハ有り。修圓と有ルは。今昔物語集ノ
み。按ズ。一ハ名。一ハ号ハ有り。法師ハ然ラる倫
いと多ク。此ハ二人の僧都ハ此ハ共トモ小幻術ハある事ヲ云
ふも更ニある。空海僧都ハ。小幻術ノ力ハ勝テ。依ハ子

そ有ける。惑ふ處うらば。死後もれを邪執を留めて。在世中此妄説を示せる。摠て魔道の所爲あり。

然るは古事談に六波羅の大政入道安藝國司の時重佛此功小高野の大塔を造られりる小材木を手扱うら持たりて其時香塗を著ぐる僧出來て云く日本國に大日如來は伊勢大神宮と安藝の嚴嶋あり大神宮を何まて幽玄れに汝あましく國司をゆる早く嚴嶋に奉仕せべしと云ふ守まきを奇み貴房をば誰と申れと問りまは奥院の阿闍利と申れと云て撥消やう小失りけり此僧をば國

司の外餘人此を見えと何てましく奥院へ詣りる時大師御戸を開き袖を差出させ給ふ此に依て五箇所を寄進せら御依と云事も見えとて清盛を此故めや弘法が深く信じとて也通えて源義平の靈に雷鳴して崇めりる小弘法眞筆此心經を守り懸りめし城恐しさの餘り小頸に挂あがら打振くちあふと平治物語小見えとて死後うもかく我執小在世中の妄説を云へり大神宮は更あり嚴嶋神も豈大日れらむやはと諸書小空海勅字受て朱雀門の額を書し流を後う小野道風朝臣其額を見て朱雀門を朱雀門と略頌小作りる程うやぐて中風して手加れり手跡も

を讚る音あり。引聲と云ふ是あり。ほく山小大なる相木
有也。其木の空小住して。如法に精心して法華經を書れけ
る。書畢て此經を安置し。如法經此よて始ま流。其時小此朝
此諸の止事れき神。みな誓を起し番を結びて。此經を守り
奉らむと誓へたと有り。諸神のかく誓ひ給ふりと云こ也。
元去此法師の言出に誰ら知らむ。釈書よ。此時書くる經
を。小塔に藏免て。一菴小ねく。如法堂と名づく。今の首楞嚴
院あり。法華經を如法經と云こ也。是よて始まる由云へり
ま。引聲の事も。古事談よ。慈覺大師を。音聲不足ありし
は。尺八を以て。引聲の阿弥陀經を吹れり。成就如是功至

莊嚴といふ處を吹得ざり。常行堂の辰巳此松扉ありて。
吹あけりひり依り。空中小聲ありて。や音を加ふよと云へ
也。是よて如是やと。や音加へありと有り。功德を聲の善
悪小依まじり物をや。

其建する院の名よ負ふ。首楞嚴經小も。定中見色陰銷受陰明
白。自謂已足。忽有我慢起。疑誤衆生。此則有大我慢魔入其心腑
と有り。相室此定中小。己る自足れと謂へる我慢心あり。衆
生を疑誤せる。妄説を吐くありむ。

諸神の法華經を守護せむと宣へり也云ふ妄説を有る中
小最憎き言あり。れ不巫學談弊小言ふ哉見る法し。

次小智證とは。圓珍法師が事あり。此を祖業を受て。比叡山を
持し居る。猶喜足を知らず。別て我が門徒を立むと。三井寺城
再興して。三尾神を誣ひて。佛法を守る神とし。

其は今昔物語。元亨釈書。古今著聞集あや小智證大師我が
白門徒を別小立てむと思ふ心有て。我が門徒の佛法を傳置
其後き所り有るや。所くよ求めて。新羅明神と共う。近江國志
賀へ行給ふ小。昔大友皇子に立らる寺あり。寺辺は荒ら
一房あり。年老る僧一人居あり。其名を教待といふ。見れ
む鮓の鱗骨あと。炊食散して。臭こと限あし。僧の躰を見る
小。貴く見ゆれを。定めて様有らむと思ひて。語らふ。老僧

云く。我此處に住て。百六十年を経り。此寺を弥勒の出世
後で。持盈寺ありとも。持べき人無に於る小。幸に師に來
て給へむ。永く譲て奉るやいふ。新羅明神は。寺に北野小止
まり。無量の眷屬圍繞せれども。他人を此を知らず。其時よ
興小乗と居人。百千に眷屬を引率して來て向ひ。明神を飲
食を奉り饗して。大師小告て云く。我は此寺の佛法を守ら
むと誓へる神れり。今聖人此寺を傳へ得て。佛法を弘め給
ふ後らば。今よと深く大師を憑まむと。老僧と共う明神
の處に至り。互小喜悅を。然る小老僧を興小乗と居人。と忽
小見え。明神を誰人かて御にと問ふ。老僧を是弥勒如

來佛法を護持せむ為。此寺に住給ふ。輿に乗る人。三尾明神の御返と答へ給ふ。然れむこそ只人は非と見おる。とて老僧の房に至れむ。始は鼻かおる。此度を極免て顔し。前小鮒此鱗骨と見おる。蓮花莖根葉子煮食ひする也。り。其後諸弟子を引具して。此寺に佛法弘免て今ふ盛なり。三井寺を云ふ。天智天武持統三代の天皇此生給へる時。小産湯の水を汲。井の有を。御井寺を云し。を大師改めて三井寺といふ。弥勒三會此曉を継しむる故あり。圍城寺と云ふは是ありと云へ。新羅明神と云ふ。前小渡唐し。ある帰。新羅國よ。伴以來れる蕃

神あれむ。佛法の守護を然も有。弥勒井の出現せりと云ふも。實には有名無實。此物あれど。釈魔此変現。此を珍。のら。然も有り。唯三尾神の出現して。佛法を守らむと誓へ。と云ふ事は。例の妄語。若實小出現せるれば。其ま。釈魔の変現あるを。誠此弥勒眞の三尾神と欺か。と。此を。菩提心。戒忘失して。善根を修し。名聞此為。己。門徒を別。立て。むと思へる。我慢心。より。起り。此僧。勝他。の名聞心。よ。三井寺。成立て。其一派を遺せる。故。慈覺。徒。智證。の徒。と。天台。二派。別れて。其徒。互。我慢。勝他。乃。邪見。を。發して。和合せ。世を。騷

乱せしを天皇をも蔑如し奉ずる事。次く記を見えて知る
傍し。後より此僧の諡号此事を僉議ありしと云。主上の御夢
小。別名城求ら麻屋うらま大通智勝れまは。智證と付べ
た也。誨カ白せざるよし。古事談三卷あど小見くるも。既小
天狗と成しかむなり。是より後の法師ども。上る依四大師の妄説を根基とて。弥
次く小。神を佛法より引率る。妄説を吐散せる事は。今盡く記
以り違へらば。取總て言はば。本地垂迹此説を。行基并が其種
を殖初る哉。四大師の其哉繁茂せしを弘通せるなり。實小
皇神の道は。大妖魔小非や。是を以て神社考小。沙門之有慢

心者多入天狗之中。傳教弘法慈覺智證等是也。とは言れりむ。
然れを神道小志有らむ人を。此を能く辨へば有るら
ま。神社考より夫本朝者神國也。中世佛氏移彼西天之法。變吾
東域之俗。神道漸廢。而以其異端離我。而難立。故設左道之説。
曰。其本地佛而垂迹神也。時之王公大人信伏不悟。遂至令神
社佛寺混雜而不疑。巫祝沙門同住而共居。嗚呼神在而如亡
神如為神。其奈何哉。讀書知理之人。可少覺也。非為庸人而言
之。と言れしを孰思ふ及し。四大師已小右の如く。魔事魔業
を脱ガまらば。其門葉末派の法師とち魔道小墮ダざるは一
人も有らばカく覺也。

形を神社考小。尊意與群鳥同翔於横川之杉。

澄圓僧が志評論。釈書の尊意傳を引て。釈尊意姓丹生氏。十七落髮修練之後任延曆寺座主。天慶三年二月二十四日逝年七十五。瞑目之後。鳥百餘集房悲鳴。見人不避。移時飛去。蓋生平分食施鳥。以木叩板群鳥飛來矣。若因是為群鳥哉。分食施鳥最沙門檀施也。何得群鳥之業哉。と云へれど。羅山先生の意は。尊意を鳥の業を得りての事。非は非。群鳥と共小。横川に杉は翔と云ふは。正しく古書に。其靈の群鳥と共了天狗と化りて。翔と云ふ事の有らむを見て記されらむを。釈書は其事を隠して。只小鳥に集れる事。

みま記して。其やがて徳行を感慕して。集へる事小。執成と依物あるべし。予は未先生の見られし書を見らむとも。尊意を後小。妙義權現と崇えたる。其縁起を見れむ。古より釈子の魔道は墮する。倫い多し。依を。我いつて。其魔道は入る。其倫を降伏して。正道に赴けむと誓ひて。其黨に入らむ。由見えし。是極めて古に據有らむ。羅山先生は其我見て言れし。れらむ。

慈惠著甲冑攻三井寺燒千手院。

元亨釈書を始め。諸書を考ふる。小。圓融院。天皇の御世。天元四年十二月。餘慶法師我。法性寺の座主小補せら依。此を智

證れ徒あり爰に慈覺の徒奏云く。眞信公始えて。法性寺を
建て。辨日法師を座主と任せし以來。九代相繼て。慈覺の門
才也。小當る。然る小今第十代也。智證の門人をえて加すは。
慈覺の徒望を失ふ。信しといふ。敕答に。檀家小告よと宣へ
は。慈覺の徒百六十人。檀家關白賴忠公乃家。了向て喧き。訴
す。あむく。爭論あり。帝聞食して。法性寺に座主始よと慈
覺の門小附り也。智行兼備の者を撰びて任する。適く
慈覺の門人多加りし故也。相次て此を領せ也。今餘慶ま
と智行の譽ありて任也。何ぞ必しも。慈覺の門を守らむ
や。況也喧爭徳を敗り。僧侶の事非也と怒坐して。百六十

人の封職を息む。茲よと兩門和せに。拒争ひ日小滋し。智證
此徒叡山出でて別院小居し。餘慶も門人を率ゐて。觀音院
小住也。その徒弟勝算。觀修。穆算あど百餘人。れや山上千手
院も在也。此時慈惠僧正良源も。天台座主也。元より是慈
覺の徒也。密に謀りて。衆徒をえて千手院を焼しめむ
とに。此事朝小聞えし。は。敕字下して云く。良源千手院を
焼て。餘慶穆算等を殺さむと欲はる。陰謀匿し難し。早く其
機を止免よと。良源表出上りて陳也。是よと後。一條院。天皇
の永祚元年九月。餘慶僧正を。延曆寺の座主と補せらる。慈
覺の徒奏して云く。智證の門徒座主小補せられむ。講堂を

開^{ヒラク}べのらびと。帝^{ミカド}を更^シた。時の関白兼家公もはと過^ヒ訟^{ソウ}せ
思^{オホシ}食^シり。同^{トウ}帝^{テイ}の正曆四年觀音院成算の徒。叡山衆と卻^{ヒキ}あ
了。慈覺の徒千手院を燒^ヤき。房舍を壞^{ヤブ}ること四十餘宇あり。
兩門相爭^{アラシ}ふ。慈覺の徒智證の徒一千人を擯^シりて。山を出せ
り。何^{ナニ}也。此時良源死^シて。既^{スデ}に九年の後あれど。彼天元四
年の存生ありし時。千手院を燒^ヤむと陰謀^{インボウ}し。起^トる。救^サふ
依^ヨりて止^トられ。ち。其宿執勝佗は惡念^{アクネン}れを止^トりて。此時
其靈^{タミ}れ現^{アラ}ち。徒^ニ千手院を燒^ヤしめ。起^トる事^{コト}れ。古書小有
しを見て言^イれし成^ナべし。今昔物語集。良源僧正成^ナ靈^{タミ}來^キ觀^{クワン}
音院。伏^ス餘慶僧正語といふ條あり。今本は本文を關^{カケ}とせど。

前後小天狗の事を記せる間。此題号何^{ナニ}依^ヨる思^{オモ}ふ。此を
決^キめて天元四年此一件の宿執に依^ヨりて來^キ起^トる事^{コト}と覺^{オモ}也。
羅山先生を。此條の關^{カケ}ぎ依^ヨ本を見て言^イれしあらむ。猶下よ
記^キに祇園を天台末寺とせる一條を見ても。良源の宿執
深^{フカ}き事は炳^{イチ}焉^ニし。ち。此後をばま^シく執^シを引^キて。比叡山と
三井寺と和^ワせ。動^ユもは。鬪爭^{カウソウ}成^ナ發^{ハツ}して世^セ成^ナ躁^{ソウ}か。宸
襟^{マク}をもれや免^メ奉^{ホウ}了。三井寺を燒^ヤくる事^{コト}も數^{カズ}く有^アり。中^{ナカ}。古
事談。永保元年六月九日。叡山の僧徒は為^ナす。三井寺燒^ヤる。
其^{コノ}日記云。御影十五所。堂院七十九所。塔三基。鐘樓六所。經藏
十五所。神社四所。僧坊六百廿一所。舍屋一千四百九十三宇。

廣考^{フキ}天竺震且本朝^{フキ}佛法興廢未有如此破壞智證大師入滅
以後歷百九十一年有^{フキ}此災云と有り。互^各小天狗とありて
此争^{アラシ}ひ也。はと同書小。西京の良真僧正此也。三井寺
を焼^{ヤキ}と^{ヤキ}り^{ヤキ}ぬ^{ヤキ}。僧房許^{ガリ}を焼^{ヤキ}て。衆徒等帰山し^{ヤキ}ぬ^{ヤキ}。是^{ヤキ}は
座主これを聞て。堂舎經藏^{ヤキ}焼^{ヤキ}らば^{ヤキ}。あそ甲斐^{カヒ}向^{カヒ}うめ。僧
房許^{ガリ}を詮^{ガリ}なき事也と云^{ガリ}。是^{ガリ}り^{ガリ}ぬ^{ガリ}。翌日^{ガリ}はと發向して。金堂
より始め。堂宇經藏^{ガリ}みる焼^{ヤキ}拂^{ハラヒ}けるとも見也。代^{ガリ}の座主此
我慢勝^{ガリ}他^{ガリ}に執^{ガリ}深^{ガリ}き^{ガリ}也。是^{ガリ}も^{ガリ}て知^{ガリ}へし。ま^{ガリ}此^{ガリ}可笑^{ガリ}き
事^{ガリ}也。此も同書小。保安二年閏五月三日。園城寺焼失のま
ろ。或寺の僧^{ガリ}此^{ガリ}夢想^{ガリ}。褐冠^{カサ}を著^{ガリ}る人^{ガリ}也。誰人^{ガリ}小御坐^{ガリ}に

と問^トへむ答^{コタ}云^{ケル}く。我^ガを新羅明神の眷属^{ケル}あり。此寺を守護^{ケル}せ
む^{ケル}。為^{ケル}小經廻^{ケル}と^{ケル}い^{ケル}ふ。夢中^{ケル}小嘲^{ケル}りて云^{ケル}く。佛像經論堂舎僧
房^{コト}悉^クく灰燼^{ケル}也^{ケル}。あり畢^ハぬ。何物^{ケル}を守護^{ケル}せらる^{ケル}。法^{ケル}きや。無益^{ケル}の
守護^{ケル}りと各^{オノ}行^{ユキ}分^{ワカ}ぬ。後^{ケル}ま^{ケル}直衣^{ナホレ}を著^キる^{ケル}。依^ヨ耆^シ老^ロ此^{ケル}人^{ケル}出
來^{ケル}る。容^{ケル}躰^{ケル}を見る^{ケル}。小直人^{タビヒト}非^ヒ也。其^{ケル}眉^{マユ}長^{ナガ}く垂^タして口^{ケル}小^{ケル}及^{ケル}ひ。
鬢^{ケル}髮^{ケル}皓^コ白^{ハク}あり。件^{ケル}人^{ケル}云^{ケル}く。汝^{コト}が言^{コト}太^タ以^テて子^{ケル}細^コを^{ケル}知^{ケル}ら^{ケル}。本^{ケル}よ
了^{ケル}此^{ケル}寺^{ケル}城^{ケル}守^{ケル}護^{ケル}の素^ソ意^イ。さ^{ケル}ら^{ケル}ま^{ケル}堂^{ケル}舎^{ケル}僧^{ケル}房^{ケル}を^{ケル}護^{ケル}ら^{ケル}。唯^タ出^デ離^リ生^シ
死^シの志^シを^{ケル}守^{ケル}護^{ケル}也。如此^{カク}き患^ウ難^{ナン}の^{ケル}と^{ケル}也。僧^{ケル}徒^{ケル}多^タく道^{ダウ}心^{シン}を^{ケル}發^{ハツ}
修^{シュ}學^{ガク}小^コ倦^{ケン}に。我^ガ此^{コノ}人^ニを^{ケル}守^{ケル}る^{ケル}也^{ケル}。云^{ケル}へ^{ケル}。此^{コノ}事^ニ園^{エン}城^{シヨウ}寺^ニの^{ケル}別^{ベツ}當^{トウ}
大^{ダイ}僧^{ソウ}都^ト覺^{ケツ}基^キの^{ケル}語^ゴ申^{マシ}所^ニあり^{ケル}と^{ケル}有^アり。此^{コノ}を^{ケル}覺^{ケツ}基^キが^{ケル}餘^{ヨリ}り^{ケル}小^コ度^{タク}

度其寺の焼れぬ。新羅明神が守護神とて在るがら。云ふ甲斐れき事哉思ひて。造言せざる。もも此夢誠れらば。彼僧此難詰ふがまりて。さ依負惜みの妄言せ依りの二がを出さ。いうをかし。死事あらや。覺鏝得造作魔心營傳法院。高野衆徒忿而鼓譟攻鏝居不見鏝而見不動衆徒曰是必鏝也。飛石中不動時血流衆徒曰非不動是覺鏝也。其後多武峯方等法師狂言曰吾是覺鏝也。怒目睨人取火箸燒爐中。手自弄之曰我始作卽身成佛之印。是兩部祕奥之印明也。

元亨釈書を始免諸書を考ふる。覺鏝を肥前國人にて平

氏なり。此記されし事は。多武峯小方等法師といふ者也。數月狂疾差。安部山の慶圓法師と云を迎へて加持せしむ。慶圓その房よ入れむ。方等目怒して慶圓を瞰み。火箸を取て。爐中にて焼く。手小弄ふ。慶圓軟語慰誘して菩薩戒を授く。方等微笑して云く。我火箸を焼く。師の心を試みむと欲してなり。然依小今師の誦戒を聞て。我心已小降。ま。慶圓云く公を誰あるぞ。方等云く我を覺鏝あり。此方等我を誣て。卽身成佛の印言は。覺鏝始免て作れと。殊。知らば。彼印言は三圓相承此兩部祕奥の印明あり。我只此の事哉言むと欲して。屢く方等よ託する。なり。慶圓云く

古今妖魅考一之卷
幸甚あり。今名徳小逢ひて未聞を聞こと字得とゆと。請談
良久しく。方等が病をれをち痊あり。羅山先生去の
事成言れしれ也。

又和州堯信爲天狗言而告慶圓曰。吾是中院僧都也。浮屠巫祝
豈能降我哉。我心慢罵之。揮斧之。我徒有神力者三百餘類。伺入
死作。燒害。自古高僧碩師。臨終多遭魔撓。皆我之所爲也。と有り。
此事も元亨釈書小。大和國に堯信と云者有り。狂疾成受く。
加持する者有り。慢罵揮斧。其父安部山の慶圓を屈し
て救ひを乞ふ。慶圓彼小到れ。堯信恭敬志く礼を作して
曰く。此ごろ陋し比丘。賤しき巫覡ら。聲を厲くして呼號

する故。我慢罵をれ。今高德小値ふま。幸あり。願はく
は左右を退けよ。我が夙志を通せむ。慶圓をれをち看病の
者成去る。堯信云く。我先世に灌頂を欲して。遂に亡き。
餘執。竭て生子鬼趣。小受。而れども法力に感ずる所を
神威有り。願はくは悲救を垂して。密灌を授與せよ。慶圓
云く。公を何人ぞ。堯信懽然とて。恥る色有り。慶圓いれ
己小授與を乞ふ。豈名を思むや。堯信良久しれ。云く。
我は中院僧都某あり。慶圓をれはち灌頂を授く。堯信歡喜
合掌して云く。宿望已小足。久く此に居。何
を以て此恩。我酬む。慶圓云く。我世に己小灰ぬる餘を。何

